

河南町文化財調査報告第1冊

一須賀古墳群P支群発掘調査報告書

1983年 3月

河南町教育委員会

は　し　が　き

河南町は、金剛、葛城、二上山の山並のふもとに自然と歴史に培われ開けてきました。

それは古くから近飛鳥地方と呼ばれる一角にあって、まさに人々の生活の痕跡が随所に残され、わが郷土の誇りとするところあります。

しかし、近年めまぐるしい高度経済成長の中、本町でも開発の波がおしよせ、多くの遺跡が失なわれてきました。

今回調査した一須賀古墳群P支群は、土砂採取により調査を実施したのですが、全面発掘を実施したP-3号墳を除き、今回の調査では新たに確認した古墳と支群の保存という成果をあげることができました。

なお近い将来、一須賀古墳群は大阪府が史跡公園（風土記の丘）として整備され、資料館も建設される予定です。

最後になりましたが、本調査に参加いただいた諸氏の労に感謝するとともに種々の指導をあおいだ大阪府教育委員会をはじめ、関係者各位に厚くお礼申し上げます。

河南町教育委員会

教育長 奥 壓 一 郎

例 言

1. 本書は、大阪府南河内郡河南町大字平石 102番地に所在する
一須賀古墳群 P 支群の発掘調査の報告書である。
2. 調査は、大阪府教育委員会文化財保護課技師山本 彰氏の指導の
もとに本町教育委員会指導課木下光弘が担当者として実施し、昭和
56年2月18日に着手し、同年3月16日に終了した。

調査の実施にあたっては、阿南辰秀、田中龍男、上田 瞳、山上
弘、伊藤慎司、田中淳司、田村充徳、河野詠子、染川佳美、奥野由
美、神原貞美の諸氏の参加協力を得ました。記して感謝いたします。

3. 本報告書作成にあたっては、調査参加者が起稿を分担したが既応
の調査については大阪府教育委員会玉井 功氏に依頼した。
なお、文責は文末に掲げ編集は、山本 彰氏に依頼した。

目 次

はしがき

例 言

本 文

第 1 章	周辺の環境	1
第 2 章	調査の経過	4
第 1 節	調査に至る経過	4
第 2 節	調査日誌（抄）	4
第 3 節	一須賀古墳群における概応の調査	6
第 3 章	調査の内容	10
第 1 節	一須賀古墳群 P 支群の位置と立地	10
第 2 節	P 2 号墳の調査	12
第 3 節	P 3 号墳の調査	15
第 4 節	P 4 号墳の調査	22
第 4 章	まとめ	22

挿 図

図 1	河南町の位置	1
写 1	寛弘寺10号墳出土の銅鏡	2
写 2	慰靈祭	5
図 2	一須賀古墳群の分布とP支群の位置	11
図 3	P 2号墳墳丘測量図	12
図 4	P 2号墳石室実測図（網目は漆喰）	14
図 5	P 3号墳墳丘測量図	15
図 6	P 3号墳墳丘の築造過程	17
図 7	P 3号墳土層図	18
図 8	P 3号墳石室裏込石の状況	19
図 9	P 3号墳石室実測図	21
図 10	石室内出土金環	20
図 11	石室内出土鉄釘	21
図 12	周溝内出土須恵器	21
図 13	P 4号墳石室実測図	23
図 14	磯長谷における終末期古墳の変遷	26

図 版

		須賀古墳群P支群周辺航空写真
図版第1		
図版第2	上	P-2号墳墳丘（北から）
	下	同 上 （西から）
図版第3	上	P-2号墳 石室開口部（南から）
	下	同 上 石室内部（南から）
図版第4	上	P-2号墳 石室内西壁（南から）
	下	同 上 石室内東壁（南から）
図版第5	上	P-2号墳 石 室（北から）
	下	同 上 石室内漆喰遺存状況（西から）
図版第6		P-2号墳石室内漆喰遺存状況細部
図版第7	上	調査前のP-3号墳（南から）
	下	同 上 （西から）
図版第8	上	P-3号墳 石 敷（南から）
	下	同 上 細部（南から）
図版第9	上	P-3号墳天井石外面（東から）
	下	同 上 （南から）
図版第10	上	P-3号墳 天井部裏込石の状況（北から）
	下	同 上 （東から）
図版第11	上	P-3号墳 石室西側掘方断面（南から）
	下	同 上 調査後の墳丘（北から）
図版第12	上	P-3号墳 調査後の墳丘（北から）
	下	同 上 （北東から）
図版第13	上	P-3号墳 石組細部
	下	同 上 調査後（南西から）
図版第14	上	P-3号墳 調査後の石室（手前排水溝・南から）
	下	同 上 排水溝（北から）

- 図版第15 上 P-3号墳 北側周溝（西から）
下 同 上 東側周溝断面（南から）
- 図版第16 上 P-3号墳 出土鉄釘
下（左） 同 上 金環出土状況
（右） 同 上 出土金環

第 1 章 周辺の環境

河南町は、大阪府の東南部に位置し、東西に 6.7 km、南北に 7.5 km と伸びており、面積は、25.48 km²を有している。



図1 河南町の位置

周辺をみると北は、太子町、西は富田林市、南は千早赤阪村、東は葛城山脈が連なりその山頂をもって奈良県御所市、新庄町、当麻町と境をなしている。

地形上からは、金剛山地の西麓にあって西方に石川を控えた台地上にあり、標高 960 m の葛城山に介し、更に町の中央には、寛弘寺川が北方に向って流れ、その東西には、南より北に伸びる丘陵が平行して走り、東方の葛城山麓にあたる傾斜した急な地形と相対した緩傾斜をなす傾動地塊で複雑な起状をくりかえしている。

ところで、河南町周辺の遺跡について通観してみると、旧石器時代に溯る石器は、現在のところ町域で全く見られておらず、最も古い遺跡は縄文晩期の遺物が出土した一須賀廃寺をあげうるのみである。この遺跡は、山城の降幡神社の西方台地上にあって、本来、奈良から平安時代初期の多数の瓦が出土している寺院跡である。^{註1}

弥生時代にはいると、中期から後期にかけて海拔 90 ~ 160 m の梅川東方丘陵上に営まれた高地性住居跡の東山遺跡があり、竪穴式住居址 53 棟の遺構等が検出された。^{註2}

南河内の弥生遺跡は、金剛山地を源に発する石川流域に散在し、富田林市の中野遺跡、喜志遺跡等があるが、同じ高地性集落として所在するのは、河内長野市の大師山遺跡等はこれに属するものである。^{註3}

又、弥生時代の青銅器として、特徴づけられるものに銅鐸がある。今まで南河内で羽曳野市の西浦より出土したもののはじめ 6 つの出土例があり、その中で一須賀領字犬上山から発見せられたという河内屋可正旧記にあるが定かでない。^{註4}

古墳時代になると、古墳の築造は、石川を源とした北西部から行われ、前期から後期まで形成のつづいた古墳群で千早川が流れる寛弘寺西方の丘陵上に見出され、寛弘寺古墳群（

ツギノ木山古墳群)と呼ばれている。

昭和57年に大阪府教育委員会によって発掘されるまで本町には分布しないとされていた4世紀後半に築造された前方後円墳が確認され、特に10号墳は、全長45mの前方後円墳で長さ3.1m、幅50cmの木棺と12字の銘文がある変形半円方形帶二神二獸鏡とともに鉄剣、鉄ノミ、刀子、ヒル鎌が出土した。^{註5}さらに、10号墳より東側の丘陵上で群の南部にあって円丘部の直径約27mある帆立貝式古墳は、上下二重に円筒埴輪がめぐり、舟形埴輪も出土している。

なお、石川流域の前期古墳として、羽曳野丘陵上には河内長野市の大師山古墳、富田林市^{註6}の甘山古墳、真名井古墳などが築造されるが、中でも真名井古墳は、全長60mの前方後円墳で内部主体は、粘土構であり、三角縁三神三獸鏡など出土したことで知られる。

古墳時代中期になると、古市古墳群のような大古墳が次々と出現するが、単に古墳ばかりではなく、東山丘陵上には、二基の須恵器焼成登窯も構築されるが、渡来系の製陶工人のものと考えられている。

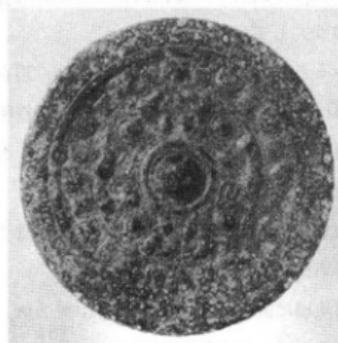


写真1 寛弘寺10号墳出土の銅鏡

後期には、5世紀になって登場する横穴式石室の採用と、古墳の小型化により爆発的に墳墓が群をなして造営される。いわゆる群集墳と呼ばれるもので、一須賀古墳群がその代表であるが、町内には白木古墳群、葛城中山復古墳群等も存在する。特に一須賀古墳群は、広大な面積を占めて存在し、中でも同古墳群の西端にあって、最も大きい^{註10}1号墳は、直径30m、高さ5mあり、横穴式石室には、家形石棺を藏し、金銅製履や金銅装單鳳環頭太刀を副葬していた注目すべき古墳である。

また、独立墳としては、大字芹生谷にある周濠

^{註11}

のある双円墳で著名な全長約78mの金山古墳がある。金山古墳は昭和21年に調査が実施され、北丘において二つの繩掛突起を有する家形石棺が安置され、家形石棺の型式変遷を考える上に貴重な資料を呈示した。また金山古墳より西方の千早赤阪村には、御旅所古墳^{註12}が存在している。さらに、終末期になると平石古墳群内にある、アカハゲ、ツカマワリ古墳が約100mの間かくで築造される。中でも昭和54年に調査されたツカマワリ古墳からは、

註13

竜文の金象嵌鐵刀をはじめ、綠袖陶棺、アカハゲ古墳と同じガラス製扁平管玉など出土した。この時期の同類の石棺式石室をもつ古墳として、羽曳野丘陵上には、お龜石古墳、ヒチンジョ池西古墳などがあり、石川の支流飛鳥川上流の東丘陵上には、觀音塚古墳をはじめ^{註14}6基分布する。

造墓活動が殆んど終りをつけると都は、奈良から京都へ移され、この地方もしだいにさびれていき、生活痕跡を残す遺跡が目だって少なくなる。そして新たにこの地方がふたたび活気を帯びたのは、800年後の町場大ヶ塚の出現であろう。しかし、その間、先述した古代の寺院一須賀廃寺や平安時代になって寛弘年間に建立された寛弘寺などの寺も盛んに造られるが、伽藍等については不明である。さらに、南北朝時代には、正平5年（1360年）將軍足利義詮が楠木軍を滅ぼそうとして、畠山国清を河内に攻め入らせたとき、平石氏が防戦したがやぶれた、平石城址がある。一帯には、千早城の要塞が広がり、この地方も戦乱の地とうつりかわっていった。（木下）

註1 大阪府教育委員会「山城廃寺（一須賀廃寺）出土古瓦」（『節・香・仙』第36号 昭和57年）

註2 大阪府教育委員会『東山遺跡』（大阪府文化財調査報告書 昭和54年）

註3 関西大学文学部考古学研究室編『河内長野大師山』（関西大学文学部考古学研究 第5冊 昭和52年）

註4 野村 肇・由井喜太郎編『河内屋可正旧記』（近世庶民資料 昭和30年）

註5 大阪府教育委員会『寛弘寺古墳群発掘調査概要・1』（昭和58年）

註6 梅原末治『河内寛弘寺の一古墳』（『近畿地方古墳墓の調査』1 昭和10年）

註7 森 浩・「口絵解説」（『古代学研究』3号 昭和25年）

註8 北野耕平他『河内における古墳の調査』（大阪大学文学部国史研究報告第1冊 昭和39年）

註9 堀江門也・中村 浩「一須賀古窯跡出土遺物について」（『陶邑』Ⅱ 大阪府文化財調査報告書第30輯 大阪府教育委員会 昭和53年）

註10 大阪府教育委員会『河南町東山所在弥生遺跡発掘調査概要』（昭和44年）

註11 小林行雄・植崎彰一『金山古墳および大藪古墳の調査』（大阪府文化財調査報告書2 昭和28年）

註12 關村清成・松村啓一『河南町の古墳』（『河南町史』昭和43年）

註13 北野耕平『日本古代の国家と宗教』（金象嵌竜文大刀 昭和55年）

註14 羽曳野市教育委員会『羽曳野の終末期古墳』（羽曳野の文化財1 昭和57年）

第 2 章 調査の経過

第 1 節 調査に至る経過

南河内郡河南町北部丘陵上には一須賀古墳群と呼ばれる約200基の古墳群で構成される大古墳群が構成されており、その一部については史跡公園として計画、整備が行なわれており、その最も密集している地域約29万m²は既に買収済みである。

ところで、史跡指定地外の一画で、昭和55年9月に過去より平石側より土砂採集を行なっていた河内土木株式会社より大阪府商工部に対して新たな土砂取りの計画が提出され、商工部より大阪府教育委員会に対して当該地の埋蔵文化財の有無についての照会があった。その結果土砂取り計画地には、周知の古墳群である一須賀P支群が所在したため商工部へは古墳の保存を要望する回答を行なうとともに、同時に現地確認を行なった。その結果計画地には周知されていた2基の古墳に加え、新たに1基の古墳を確認するとともに、3基の内1基(P3号墳)については土砂取り作業がすぐ近くまで行なわれていることを併せて確認した。

大阪府教育委員会と本町教育委員会は河内土木株式会社を交えて保存の協議を行なったが、P3号墳については土砂取りが古墳際までおよんでおり、安全面からみても現状で保存することは困難であるとの結論に至し、P3号墳については土木工事に伴う埋蔵文化財発掘調査届の提出を依頼し、残る2基の古墳については再度協議することで合意に達した。

P3号墳の調査は、本町教育委員会を主体として河内土木株式会社の全面的援助のもと、昭和56年2月18日から同年3月16日まで実施することとなった。

なお残る2基の古墳については、調査後の大坂府商工部指導課を交えた協議で第4章で述べるように保存が決定したことをつけ加える。(木下)

第 2 節 調査日誌(抄)

発掘調査は昭和56年2月18日から3月16日にかけて実施した。以下調査日誌を掲げ調査経過とする。

昭和56年2月18日

P3号墳の発掘調査開始。樹木の伐採及び草刈りを行ない、主軸杭打ち終了後地形測量(1/100)を行なう。

2月19日

雨の中P 2号墳及びP 3号墳の慰靈祭を行なう。現状写真撮影終了後墳丘部南側表土（黒色土）の除去作業を行ない、石室内部においては流入している黄色土の除去作業を行なった。石室内攪乱層より金環1、鉄釘2、須恵器片等及び漆喰破片等を検出する。

2月20日

北東部地形測量（ $1/100$ ）を行なう。3方向（東側、西側、北側）の墳丘上にトレンチ掘作業を行ない、石室内疊層の堀り下げ及び遺物の検出を行なう。

2月21日

東側表土（黒色土）の除去作業を行なう。東側トレンチ北壁断面実測及び石室内敷石の検出作業終了後写真撮影を行ない、敷石の平面実測を開始する。石室内天井部の漆喰残存状況の写真撮影を行なう。

2月23日

雨天中止

2月24日

午前中雨のため午後より作業を開始する。西側トレンチ北壁断面実測を行ない、石室内では敷石の平面実測を平行して行なったが再び雨が降り出し作業を中止する。

2月25日



写真2 慰靈祭

前日来より雨が雪に変って積っており雪掻き作業から始める。雪掻き終了後石室内敷石の平面実測を行ない、各石のレベルを取る。これと平行し、西側トレンチ北壁断面実測を行なう。午後より石室の立面実測を行なう。

2月26日

石室の掘り方確認のため天井部より

掘削作業を始める。北東地区掘り下げ作業を行ない南東地区においては、空濠の掘り下げ作業を行なう。

2月27日

北東地区の空濠の掘り下げを行ない南東地区の空濠写真撮影を行なう。

2月28日

北東地区の空濠西壁断面（土層）の写真撮影を行ない、北西地区の周濠掘り下げ及び石室内の敷石除去作業を行なう。

3月2日

午前中は夜半よりの雪のため作業を中止し、午後より石室内敷石除去作業及び天井石の裏込め石の実測を行ない、石室西側羨道部の石材抜き取り跡を検出する。

3月3日

北西地区の周濠掘り下げ北トレンチ内東壁土層写真撮影及び裏込み石の写真撮影の後、裏込め石の除去作業。

3月4日

雨天中止。

3月5日・6日

北側アゼ除去作業後、盛上測量図（空濠内埋土除去後）作成及び天井石平面図作成。

3月7日

石室の掘り方及び排水溝の追求。

3月9日

雨天中止。

3月10日

P 3号墳の地山測量及びP - 2号墳の樹木の伐採。

3月11、12日

P 3号墳の石室掘り方断面実測（北トレンチ）及びP 2号墳地形測量。

3月13日

P 2号墳石室内実測及びP 1号墳天井石平面実測。

3月16日

P 2号墳石室実測及び地形測量終了後、P 2号墳埋戻しを行ない、図面及び用具点検後全員山を降りる。（田中）

第 3 節 一須賀古墳群における既応の調査

一須賀古墳群は、江戸時代から地元の人々の間では知られていたが、古墳群として分布と構成について分析したのは上野勝己氏が最初と言って良いだろう。「一須賀古墳群分布^{註1}調査」と題する報告のなかで、尾根上に築かれた約150基の古墳はすべて横穴式石室をも

つ円墳であり、石室は両袖をもつものはない。また石室開口方向は、南西から南が多いことがあげられる。古墳群分布状況から、最北端のグループ（仮称Ⅰ群）、中央部のグループ（Ⅱ群）、丘陵頂上部のグループ（Ⅲ群）に分けることができる。Ⅰ群の古墳は少数で内部が確認できるのは120号墳のみで詳細は不明であるが、Ⅱ群は100余基の古墳が群集し一須賀古墳群の中心を成している。Ⅱ群の大きな特色は、古墳が北西へ派生する各尾根を利用して系統的に築かれ、更に各尾根の一系統を一支群とすれば10支群を数えることができる。各支群の古墳基數に多少はあるが、支群が石室の大きさや石材に於て、各尾根の末端から上部に向かうに従って、中型→巨大化→縮小化という傾向を等しくもっている。石室規模の変化はそのまま古墳造営の時間的な推移、すなわち、尾根の末端のものは古く上辺に向かうに従って新しくなることを示している。Ⅲ群の古墳は、Ⅱ群の延長であり、本来はⅡ群に属するもので、Ⅱ群→Ⅲ群は時間的推移を示す。築造時期は、6C中頃から7C中頃の間であろうとされた。古墳群に対するこの考え方は以後50余基にのぼる古墳の調査結果からも、基本的に変える必要はないものと思われる。ただ石室は両袖式・片袖式・無袖式とバラエティーに富んでいる。

1968年～69年にかけて大阪府は弥生時代後期の高地性集落と古墳群を初めて調査した。^{註2}これは、宅地造成計画に対する事前調査であったが、造成計画と前後して古墳破壊が起った。

調査した古墳は約20基である。上野氏のⅡ群に属する古墳で丘陵の下部にある。外形はほとんどが円墳であるが、1号墳は方形墳の可能性が高い。1号墳は墳丘頂にあり、一須賀古墳群のなかでは、初期に築造された古墳である。副葬品には、須恵器や土師器の他に、金環や金銅製冠帽・金銅製單鳳環頭大刀把頭が出土しており、特異な古墳である。8号・9号の2基は、横穴式石室墳ではなく、木棺直葬墳で初期に築造されたものであろう。特に8号墳は割竹型木棺であり、古いと考えられる。1号・8号・9号・17号は標高110m前後と比較的低い位置にある。17号墳は径12mと外形は小さいものの、装飾把鉄刀、銀製刀装品などが出上し、古い様子を示す。排水溝をもつものは、16・17号の2基だけであるが、墓道をもつものや敷石をもつものがあり、これらが排水の役目をはたしたのかもしれない。

また、同時に弥生時代中期から後期にかけての高地性集落の調査もなされ、集落構造や生活様式の追求が行なわれ多大の成果をおさめている。その結果は東山遺跡として報告さ

^{註3}
れている。

1968年の破壊問題から大阪府では、一須賀古墳群の一部を買上げ、史跡公園化することになった。古墳の最も密集している部分29万m²（上野氏分類IIグループにあたる）で、約150基の古墳が存在する。1970年には一須賀古墳群を含め近飛鳥の分布調査がなされ、古墳の正確な位置が公にされた。^{註4} 公園内の整備と共に、公園内の古墳の調査が、1972年から3ヶ年にわたって行なわれた。

1972年度は、D支群の尾根を中心に調査が進められた。^{註5} D支群8基、F支群2基で、D-11号とF-2号墳が方形墳と考えられる他は、円墳であった。内部構造はD11号墳が木棺直葬であった他は、すべて横穴式石室であった。D4号は径25mと大きな円墳で、石室も片袖式石室で全長9.7mと大きい。出土遺物についても、りっぱな金銅製飾金具や釦子等が出土し、他と比べて際立っている。中心的な古墳と考えられるが、D10号墳も径15mと言いいながら玄室の規模はD4号とはほぼ同じで、副葬品も金製耳飾・銀製釦子が出土しているほか、当古墳群ではめずらしい馬具の出土をみている。また、D12号墳は径19mを測り、石室は4・10の2基と同規模を有する。副葬品は銀装環頭柄頭や馬具が出土している。D群では4・10・11の3基が墳丘・石室の規模においても、副葬品の出土に関しても他と比べ際立っている。D5号墳は、径14mの円墳であるが築造時期が7C初頭と考えられており、一須賀古墳群内でも新しい時期のものであろう。

F支群は、D支群を形成する尾根から北へ派生する小さな尾根上に2基築造されている。2基ともに墳丘・石室の規模が同じであり、副葬品も同程度であった。

つづいて、1973年には第IIグループB支群10基の調査が実施された。^{註6} それらはすべて横穴式石室であった。墳形については、5.6.7.11の各古墳が方墳のほかは、円墳である。その他調査から導かれた問題点として、以下の5点に整理された。

①石室の形態としては、1・2・3号墳が平面プランにおいて類似性を有し、8・9・10号墳が相互関連的に形態変遷を行なっている。それらは相互に同一の造営主体の所産になることが規定された。②1石室に3体程度葬られており、先葬は追葬を予定した位置に埋葬されている。③6C中葉には、羨道埋葬は行なわれておらず、袖部との関連が指摘できる。④副葬品は鉄製品が少なく、ミニチュア炊飯具の出土が多い。これらは政治的基盤、あるいは出自の特殊性を示すものではないか。⑤1・2・3号墳、5・6・7・11号墳、8・9・10号墳の3グループに分けられ、それぞれが6C中葉～6C末に至る時間の流れ

を有する。よって、B支群の10基は3家族の半世紀に及ぶ造墓活動の結果である。

また、(群集墳)問題点として、調査参加者の広瀬和雄氏は、B支群は主尾根とも呼ばれるべき丘陵上に立地する12基、四小支群から構成され、これら四造営主体は、ほぼ同時期に墓域を獲得し、ほぼ同じように造墓活動を終了したようである。一須賀古墳群の一つの特色として、支群ごとの副葬品のちがいがはっきりしていることがあげられる。こうした事実は、小支群の集合としての支群が特定の背景を持っていていることを示している。と特質をあげている。^{註7}

1974年には11基の古墳が調査された。この年は群としてまとまった地域を調査するよりも、史跡公園の見学コースに当る古墳を中心に行なわれた。E支群が2基、J支群1基、^{註8}L支群2基、K支群4基と1972年調査のD支群の残り2基の調査であった。

E支群は、北に延びる小尾根に築かれているが、尾根自体に段差があり、丘陵先端にそれぞれ造られている。墓道は同一谷方向に降りて、幹道を形成している。丘陵の最高位置に古墳は築造されていない。2基とも盜掘がひどく、副葬品についてはよくわからない。E-3~6の各古墳は存在しないことが確かめられた。

D支群2基は、D4号より東側、高位置にある。4~13号墳は比較的密集しているといえるが、D2・3号の2基は少しほなれている。別のグループと考える方が良いかもしれない。問題点は、3号墳の石室を破壊することによって2号墳を築造していることである。2号墳の周溝を利用して3号墳の石室を築いたとも考えられるが、2号は無袖式で小さな割石を使用しているのに対して、3号墳は片袖式で大きな自然石を使用しており、3号→2号の順に造られたとするのが妥当であろう。D1号墳は存在しないことが判明した。

K支群は、丘陵上に9号墳を中心に密集して造られている。9・11両古墳は、石室の規模など同程度である。11号墳は長大な排水溝を持つ。

以上、報告書・調査概報あるいは研究報告を参考にして、調査の年代を追い、古墳調査の成果を一順してみた。調査結果の理解も充分にはおこなえていないが、以下、一須賀古墳群の特色のようなものを記述したい。

一須賀古墳群は、6世紀中ごろに築造が開始され、7世紀前半をもって終了する。追葬も7世紀前半頃には行なわれなくなったようである。北西方向約0.5kmの所に敏達天皇陵と言われる前方後円墳がみられるが、古墳群中には前方後円墳はみられない。若干の方形墳以外はすべて円墳である。埋葬方法は、数基の木棺直葬墳をのぞけばすべて横穴式石室

である。木棺直葬は、築造当初にのみ行なわれているが、木棺直葬と横穴式石室とに時間差は認められない。横穴式石室内には木棺あるいは石棺が安置され、2～3体埋葬されるのが最も多い。石室は自然石や割石で構築され、玄室長2.5～4m、玄室巾1.5～2.5mのものが多く、方形プランに近い形をもった石室と言える。また、羨道が短かく、一段高くなつたものもある。副葬品は、盗掘が多く、残りは良くないが、金銀製品が比較的多く出土している。ミニチュアの炊飯具が15基16石室から出土をしており、大きな特色と言える。一須賀古墳群と同時期の古墳では馬具等の出土が多いが、それらの出土がほとんどみられない。石室形状やミニチュア炊飯具の副葬から渡来系氏族との関連が注目されている。^{註9}

(玉井)

註1 上野 勝己 「一須賀古墳群分布調査」(『古代学研究46』1966)

註2 大阪府教育委員会『河南町東山所在遺跡発掘調査概要』1969

大阪府教育委員会『河南町東山弥生集落跡発掘調査概要』1970

註3 大阪府教育委員会『東山遺跡』1979

註4 大阪府教育委員会『近飛鳥遺跡分布調査概要』1971

註5 『古代を考える 3』「河内飛鳥と磯長谷」1976

註6 大阪府教育委員会『一須賀古墳群発掘調査概要(1)』1974

註7 広瀬 和雄 「群集墳論序説」(『古代研究15』) 1978

註8 大阪府教育委員会『一須賀古墳群発掘調査概要Ⅱ』1975

註9 水野 正好 「漢人系氏族の古墳をめぐって」(『アジア文化』) 1971

野上 丈助 「河内の古代遺跡と渡来系氏族」1975

第 3 章 調査の内容

第 1 節 一須賀古墳群P支群の位置と立地

一須賀古墳群の存在する丘陵は、尾根が様々にいりこんどおり、やや低くなった谷地形には、田畠が営なまれている。その中でも今回調査したP支群は、一須賀古墳群南西端に他の支群とはやや離れて位置し、行政区画では河南町平石に所在する。P支群の存在する丘陵の裾部、府道竹内河南線の南側には、アカハゲ古墳、ツカマワリ古墳などの横口式石郭と呼ばれている墓制を含む古墳時代終末期にあたる平石古墳群が存在し、東側尾根最高所には、南北朝時代の楠木氏の出城である平岩城跡が存在している。

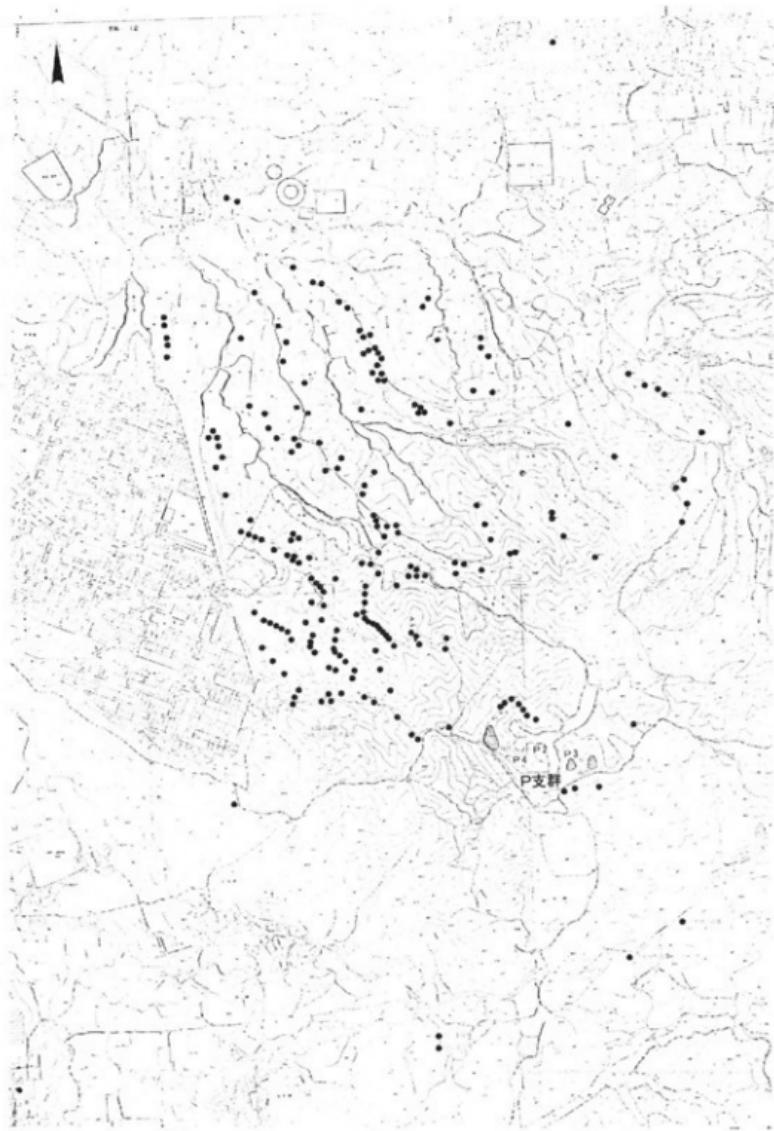


図2 一須賀古墳群の分布とP支群の位置

一須賀古墳群P支群の、古墳の存在する地形をやや詳しくみると、里道の通っている東西に伸びる陵線の頂上南側斜面のやや下った、標高220m付近に存在し、調査以前には、2基の古墳が周知されており、P1号、P2号墳と呼称されていたが、今回の調査で、新たに2基の古墳を確認した。これらの古墳は、今回確認しえなかった1号墳を除いて、3基がほぼ東西に、等間隔に近く存在しており、いわゆる山寄せ立地の古墳群である。また北側尾根が急に下る地形に対し、南側はゆるやかに下る地形が形成されており、当古墳群はちょうど南側のゆるやかに下る東西に広がった独立丘陵とみられる丘陵の西側に位置する。丘陵東側は、すでに土砂採取が進んでおり不明であるが、旧地形図や遺跡地図等を参考にすると、そこにも何基かの古墳が存在していたらしい。

P支群は現在4基確認されているが、今回このうち支群中央のP2号墳を墳丘測量及び

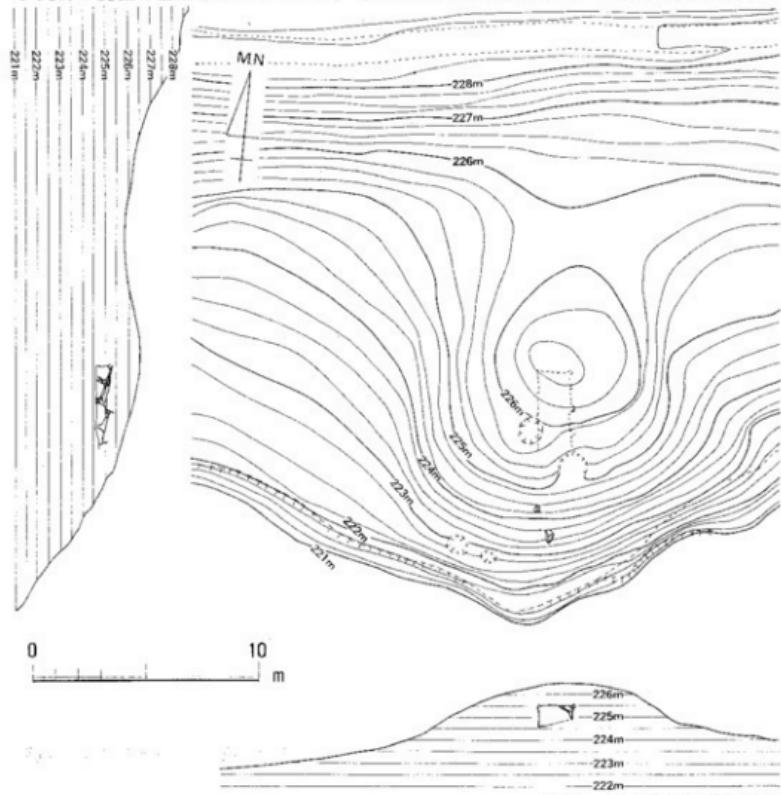


図3 P2号墳墳丘測量図

石室内実測、東側の石室が露呈しているP 3号墳を、墳丘測量及び全面発掘調査を行なった。なお、里道より北側に位置するP 1号墳は今回確認し得ず、また、2号墳の西側に位置するP 4号墳は、石室現状実測を行なうにとどまった。（上田）

（註）新しく確認した2基の古墳は、P 3号墳、P 4号墳と呼称する。なおP 2号墳の位置は「大阪府文化財分布図」の位置よりやや北側にずれることを付け加えておく。

第 2 節 P 2号墳の調査

墳丘 P 2号墳は、P 支群の存在する東西に広い独立丘陵の中央部、標高225mに存在し、墳丘は、ほぼ完存している。墳丘の形状は、発掘調査を行なわなかつたので構築の技術については不明であるが、墳丘測量の所見によると、西側の等高線が比較的直線的に走り、かつこの部分が最も旧状をよく残していると思われることから一辺長約10m、高さ約2mの方墳であるものと推定される。

墳丘は、南側が急な墳丘斜面になっており、墳丘を丘陵より独立させるため、西・北・東側にかけて「コの字形」の地形の削り取りが行なわれたものと推定される。削り取り部分の幅は、北部空濠が墳丘裾部より里道付近の急斜面までとすると、約5mをはかるが、東西の空濠も墳丘測量図より北側とほぼ同じ幅であると推定できる。このことから墳丘一辺長と空濠巾は、2:1の割合であり、この古墳の墳丘は計画的に築造されたことがわかる。

また、墳丘築造プランとして墳丘の中央は、石室奥壁にあたる所であるが、石室の入口は墳丘裾部まで及ばず約1m墳丘内にはいりこんだ所に存在しており墓道の存在が予測される。

墳丘の状態をやや詳しくみると、墳丘は現状では、雑木林となり、墳丘南西側斜面に盗掘孔が掘られている。また、南側の石室中央ラインやや西よりの所にも人がかろうじて潜りこめる程の盗掘孔が掘られており、そこより石室内に入いることができる。墳丘斜面には、石室石材か、外護列石片かは不明であるが、人頭大の石が散在している。（上田）

石室 P 2号墳は、調査当初から現状において保存することが決定していたため、発掘調査は実施しなかった。しかし保存資料としての石室の実測を実施するため、石室開口部について、調査者が、最小限出入り出来る程度ひろげるとともに、写真撮影のため、石室内に堆積した枯葉等の腐喰土のみ石室外へ排出した。

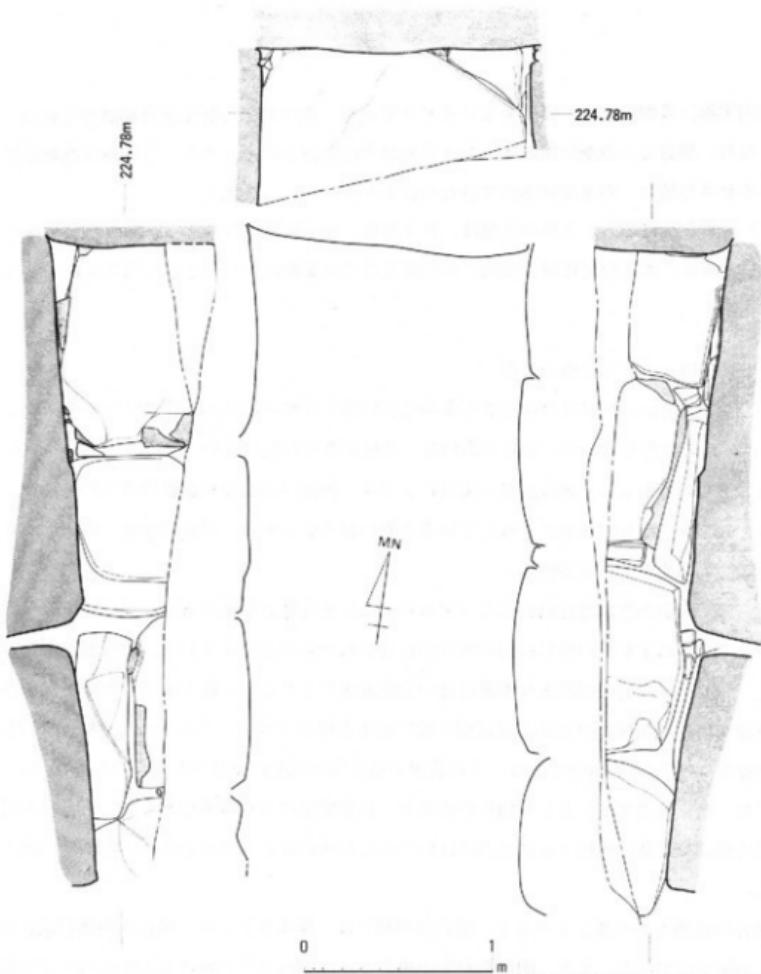


図4 P2号墳石室実測図（網目は塗喰）

石室実測調査の所見によると、本古墳は、無袖式の横穴式石室に属するもので、現存長は東側で3.55m、西側で3.4mをはかり、幅は奥壁部、中央部、開口部とともに、ほぼ1.5m前後をはかり、横穴式石室としては小型の石室に属するものである。

使用石材は、いずれも花崗岩の切石を用いて構築されており、奥壁は、基本的には一枚石であるが左右の上端部のみ別の石材がはめられている。側壁は東西ともに1段～2段で構成されているが、切石を使用しているにもかかわらず、東西の両壁を対称に配置する等の配慮はなされていない。また、天井部との接点や石材の間には、小型の石をつめ石室の

安定をはかっている。

天井石は2枚の巨石が使用されているが、両石ともに開口方向へ向って約5度の傾斜がみられる。また、石材の継ぎ目や、側壁の凹部には、多量の漆喰が存在しており、遺存状況からみて本来は石室の全面に漆喰が塗抹されていたと推定される。

石室の壁面構成や規模、漆喰の使用状況からみて本古墳は古墳時代終末期の構築と考え

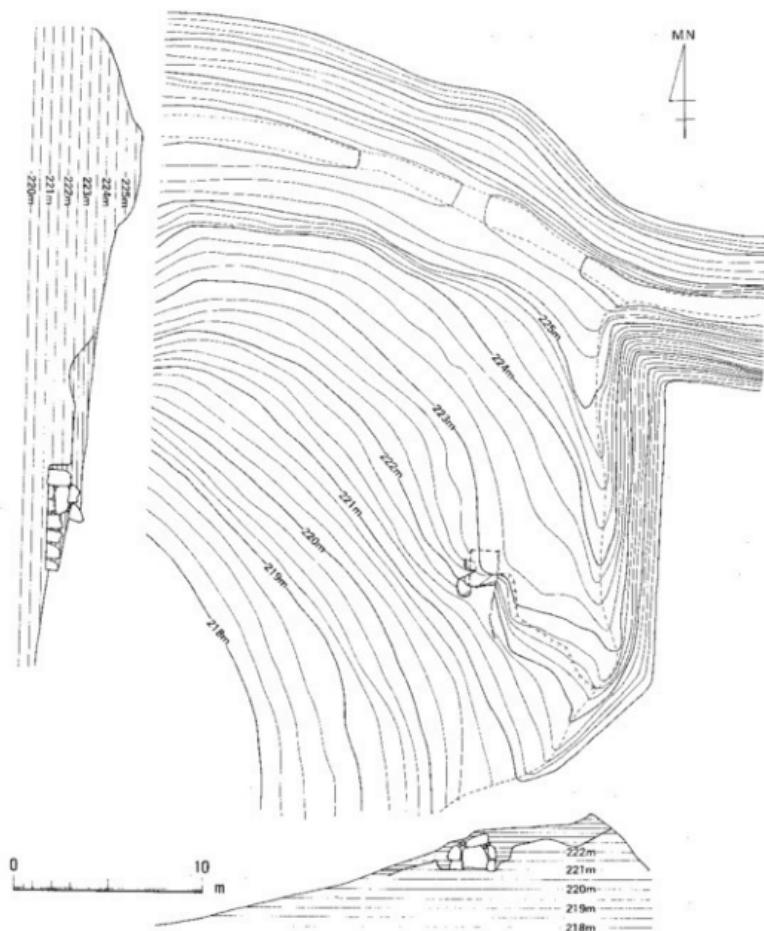


図5 P3号墳墳丘測量図

られるが、石室規模や壁面構成がほぼ同一の古墳として、太子町に所在する二子塚古墳があげることができる。（田中・山本）

第3節 P3号墳の調査

墳丘 P3号墳は、西南方向へ下る尾根の頂上やや下ったところに位置する。墳丘測量の際にはすでに墳丘盛土はほとんど流出しており南に開口する横穴式石室が露呈していた。墳丘周辺は、後の土地利用として削平され杉林となっており、石室東側は、すぐ近くまで河内土木による土砂採取が進んでおり旧地形は不明であるが、過去の地形図及び航空写真から判断すると、同じ尾根が上方に続いていたものと推定される。測量調査の時は不明であったものの封土の状態を知るために石室の東側、西側、北側にトレンチを設定し調査した結果、墳丘の比較的よく残っていた北側と東側トレンチにおいて周溝を検出した。この成果をもとに周溝の全面調査を行なった結果、本古墳では、幅約4.75m、深さ約1.1mの地山削り出しの大きな周溝が墳丘北側から東側にかけてL字状をなして巡っていることが確認された。このことから本古墳は、一辺約8mを計り周溝を含めると一辺約13mにおよぶ古墳であることが判明した。

墳丘構築の順序を述べると、まず、斜面の頂部を角とするL字形周溝掘削を含む地山整形を行ない、その後地山に石室の掘り方を掘削する。掘り方は、残存墳丘上面で東西4.25m、南北5.75mを計り、石室北側、西側を1段、東側を2段に掘削していた。石室北側掘り方埋土は上面より石室基底部まで10層の版築様たきしきめを行なっており、東側では石室側壁1段目を掘り方に寄せ、2段目近くまで6層の版築様たきしきめを行ない、次に第2段石を設置した後、盛土を一気に埋め戻したものと考えられる。次に盛土を行なうが、盛土は、石室天井部までの下位盛土（明褐色土）とその上層の上位盛土（暗褐色土）の2層にわけて行ない、これによって比較的丁寧な造りの墳丘であることがわかる。また周溝部検出のおり東側周溝の床面には密着した状況で8世紀代と思われる須恵器杯身が出土したが、その年代観から本古墳に伴うものとは判断したい。（上田）

註1 L字形の空濠を持つ古墳は-須賀P3号墳を含めて数例の古墳が知られ、その類例や意味については山本 彰氏の論攻がある。山本氏はL字形の空濠を持つ古墳の意味を古墳時代終末期の墳丘規模の規制下において「視覚的に墳丘をより大きくみせる効果」としてとらえている。山本 彰「河内飛鳥觀音塚古墳の検討 -墳丘構築技法における類例を中心として-」（『関西大学考古学研究室創設30周年記念考古学論攻』1983年）

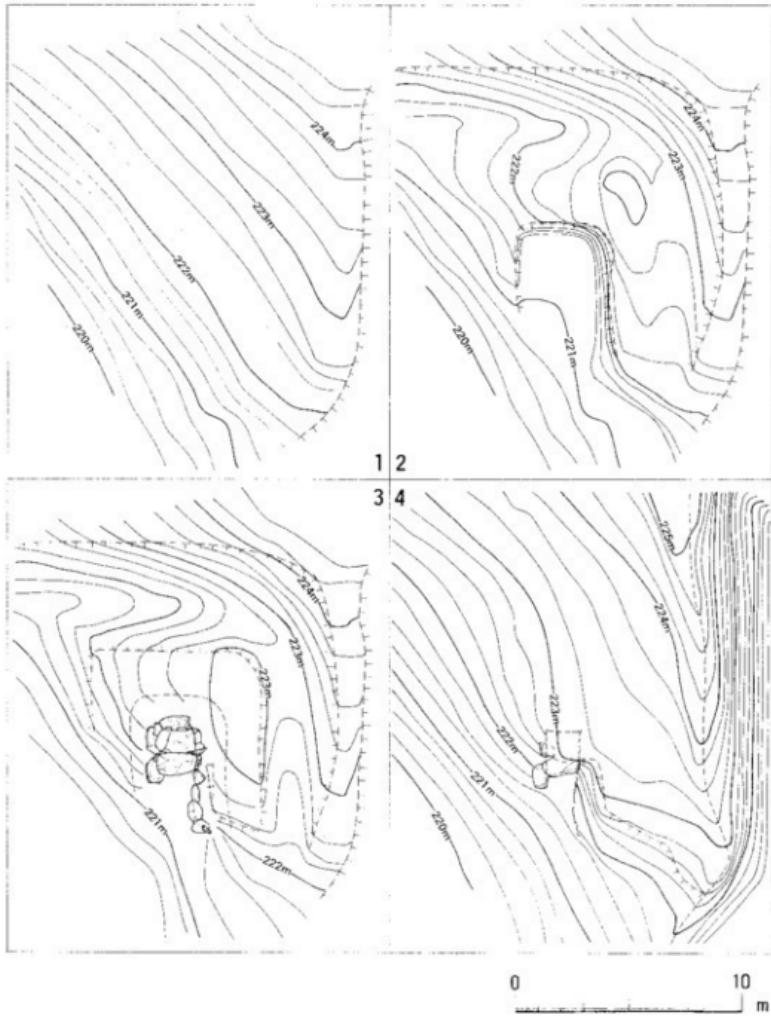


図6 P3号填埋丘の築造過程

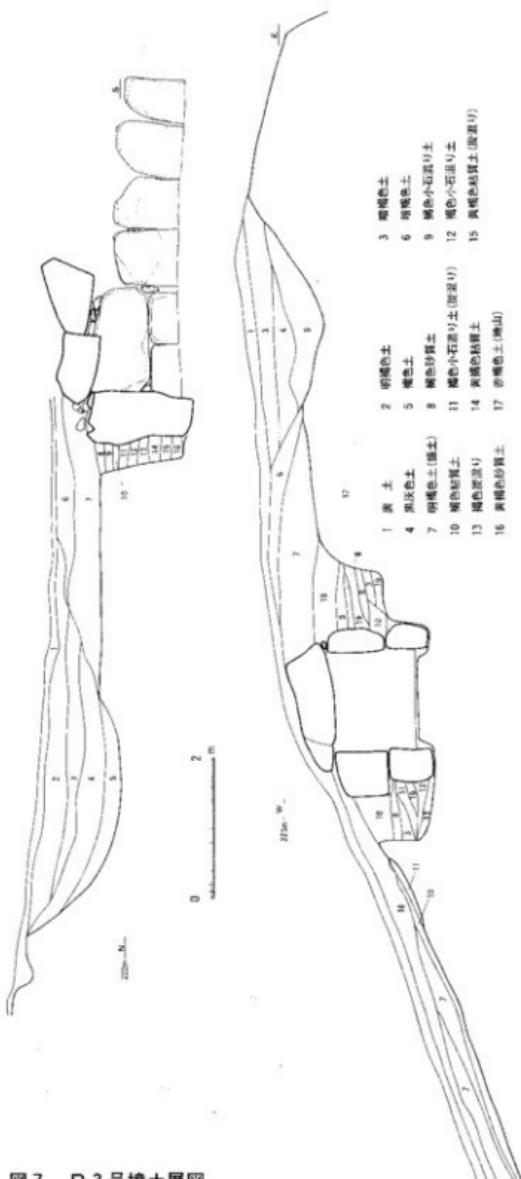


図7 P3号墳土層図

石室　調査開始時すでに石室は開口しており羨道部天井及び西側羨道石が欠失しており、このため石室内部に入ることが可能であった。なお石室内部は全面を腐植土に被われていた。

本古墳は両袖式の横穴式石室の範疇に属するものと思われるが東側については羨道の石が抜き取られており、判然とはしない。現存する全長は東側壁で4.5mをはかるが、西側壁は盗掘により羨道部を破壊されており判然としないが、石の抜き痕から復元すると東側とほぼ同様の規模を有していたと推定される。玄室幅は奥壁及び中央部で1.4mをはかり、羨道部は復元すると約1.2m前後と推定される。なお羨道西側では壁石2個分の抜き取り跡を検出した。

石室の基底には敷石が多数認められた。この敷石は一辺0.3m前後の川原石を敷きつめたもので玄室及び

羨道部北側においてのみ認められたが、その設置状況からみると玄室北東隅に石を置いた後、順次北西から南東にかけ石室主軸に対し斜めに(北45°)敷きつめられたと考えられる目地が随所に認められた。敷石の標高はほぼ2.2-3.0mをはかり、羨道端部の敷石は盜掘により欠落していたが、これらの抜き取り跡は攪乱のためか検出できなかった。なお敷石の大きさは0.3m前後の川原石が多く最大では0.4×0.5mのものがあり敷石より天井石までの高さは約1.9m前後をはかる。なお敷石上面には小石が多数敷詰めてあり鉄釘がその中より攪乱を受けながらも出土している。

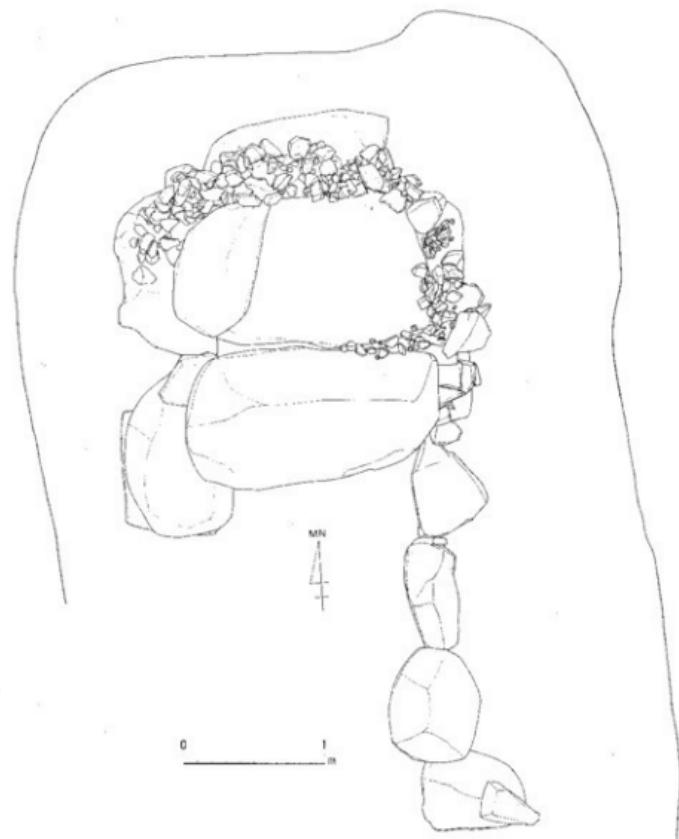


図8 P3号墳石室裏込石の状況

石室を構成する石材は花崗岩を利用したもので、東側壁の奥より2石は長さ0.7m、高さ0.4m前後の石を横に用いており、その上に大形の長さ1.5m、高さ0.8mの石材1個を用いている。また東側羨道部は長さ0.7m、高さ0.9m前後の大形石材を縦に用いている。西側壁も東側壁と同様の造りで奥より長さ1.4mと0.9m、高さ0.4m前後の石を横に用いその上に大形の長さ1.2m、高さ0.8mの石を横に用いている。

奥壁は大形の長さ1.4m、高さ1.1mの石材を用いており、天井石は長さ1.1m、高さ0.6～0.7mの石材が2個残存していた。

石材はすべて荒い加工痕が認められたが奥壁では花崗岩コタタキによる調整技法が見られ切石石室の範囲に入るものと考えられる。また石材と石材の隙間については側壁と天井石との接合部には石材をつめており、左右の高さが一定になるように配慮されている。

裏込石については天井部及び奥壁付近のみで見られ大小さまざまな石を用いている。両壁は天井部に対してほぼ垂直に立っており、天井石は東を頂とする直角三角形状を定している。これはこの古墳が斜面上に作られており、力の分散を考える上で西壁の石材の幅を長くして、東壁に天井石の重さをかけて、天井石のズレをなくすように考えられた物と考えられる。なお奥壁部東側上面に少量ではあるが漆喰が残っていた。

石室内の出土遺物は鉄釘、金環及び須恵器片のみであるが、鉄釘及び金環は出土層位も異なっており、すべて盜掘による攪乱を受けているとされる。石室の前方には墓道を確認することはできなかったが、石室前方に素掘の排水溝施設が確認された。排水溝は南北方向に対してのびており、石室羨道内へ0.4m入った所より南へのびており、現存する全長4.5m、幅0.2～0.45mをはかり、深さ5～10m前後をはかる。（田中）

出土遺物 出土遺物には石室内において検出された一対の金環、鉄釘、東側の空溝内から出土した須恵器がある。以下、各遺物について述べる。

金環（図10） いずれも銅芯金貼製と考えられる。両者ともやや楕円形を呈しているが、2の抉部は、1の抉部に比べてやや広くつくられている。断面はいずれも円形を呈しており1は、直径2.4cm、2.25cm、厚さ0.5cmをはかり、2は直径2.5cm、2.3cm、厚さ0.5cmをはかる。（山本）



図10 石室内出土金環

鉄釘（図11） 石室内から総数14本が出土した。うち完存するものは、1・3～7・14の7本であるが、長さ12cmをはかる大きいものと、9cm弱のものの2者が存在するが、断面は正方形を呈するものが主流を占める。頭部は基本的には折頭であるが、1のように座金をはめたものも存在する。釘の大半には木質が付着しているが、上方が横方向で下方が縦方向のものと、全面が横方向のものが存在している。なお、木質から導き出された木棺の厚さは約4cmである。（山本）

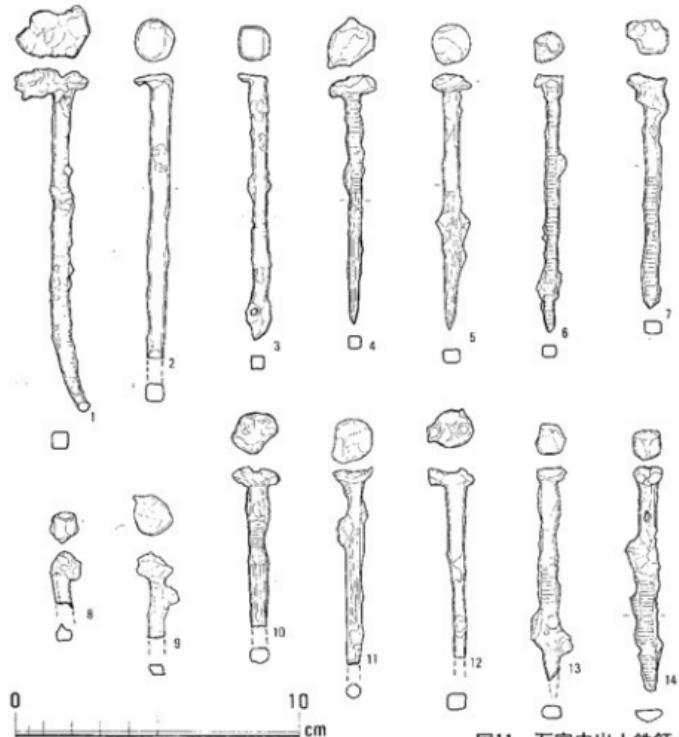


図11 石室内出土鉄釘

須恵器（図12） 東側周溝内から出土した杯身
であり、口縁部の直径15.1cm、器高3.6cmをはかる。
口縁部はやや外反し、端部は丸くおさまっている。

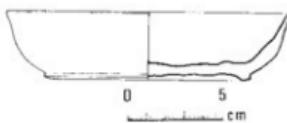


図12 周溝内出土須恵器

高台は杯部にやや斜めに貼り付けたもので、直径10.9cm、高さ0.3cmをはかる。調整は、杯部内面から杯部口縁部、高台にかけてナデ調整を行なっているが、外面底部は未調整で、粘土縫の痕が明確に残存している。胎上は、小石及び黒色粒、白色粒を含むか密で、色調は灰褐色を呈す。これらの特徴より、この須恵器杯身は8世紀前半のものと推定され、周溝が、この時期まで機能していたと推定される。（上田）

第 4 節 P 4 号墳の調査

P 4 号墳は、P 2 号墳の西方約15mに位置している。調査前は周知の古墳として把握されていなかったが、P 2 号墳の測量のため樹木を伐採した結果、石材が露呈し古墳であることが判明した。このためP 2 号墳の実測調査と併行して、本古墳の現状実測を実施した。（図13）

埴丘 墳丘の盛土は全く流出しており石室の天井石が露呈している。測量調査の結果でも、埴丘の形状をみいだすことは不可能であるが10m内外の小規模な古墳と考えられる。

石室 本古墳の内部主体も、P 2 号墳、P 3 号墳と同様横穴式石室で、現状では2石の大井石と南端では東西の側壁が露出している。石室内は流土で埋没しておりその内容を明確に知ることはできないが、現状から観測すると玄室幅1.2mの短い両袖を持つ切石づくりの小規模な横穴式石室と推定でき、P 支群における他の古墳と同様7世紀代に入って築造された古墳と考えられる。なお、南側天井石の南端には後世のものと考えられるが、石材を割った際のクサビの痕跡が明瞭に残っている。（山本）

第 4 章 ま と め

- 磐長谷の終末期古墳の中におけるP支群の占める位置 -

1.

今回の調査は最終的には3基の古墳がその対象となりうち1基の古墳についてはほぼ全面の発掘調査を実施した。調査の内容については第3章でのべたが、3基の古墳がいずれも古墳時代終末期に入ってから築造されたと知りえたことは多大な成果といえる。本章では、P 支群の所在する磐長谷周辺の終末期横穴式石室を中心にながめその中でP 支群がどのような位置を占めるかについてのべまとめにかえたい。

畿内の横穴式石室は、白石太一郎氏の指摘によると後出するにつれ石材が大型化し、ついには切石によって整備され縮少していくという過程がたどられており一応の編年が成立

註1

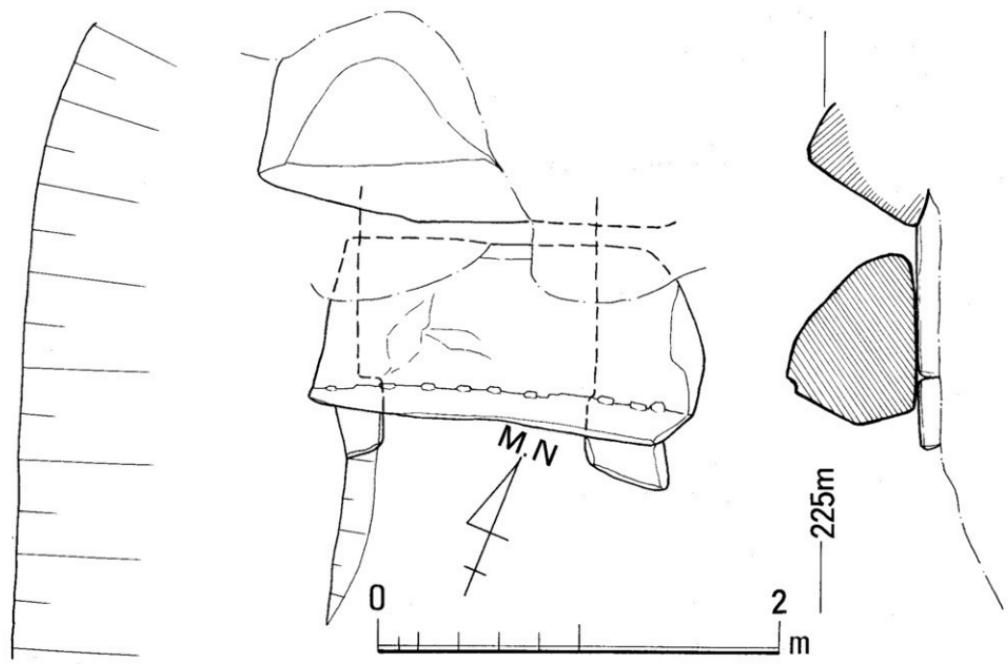


图13 P 4号填石室实测图

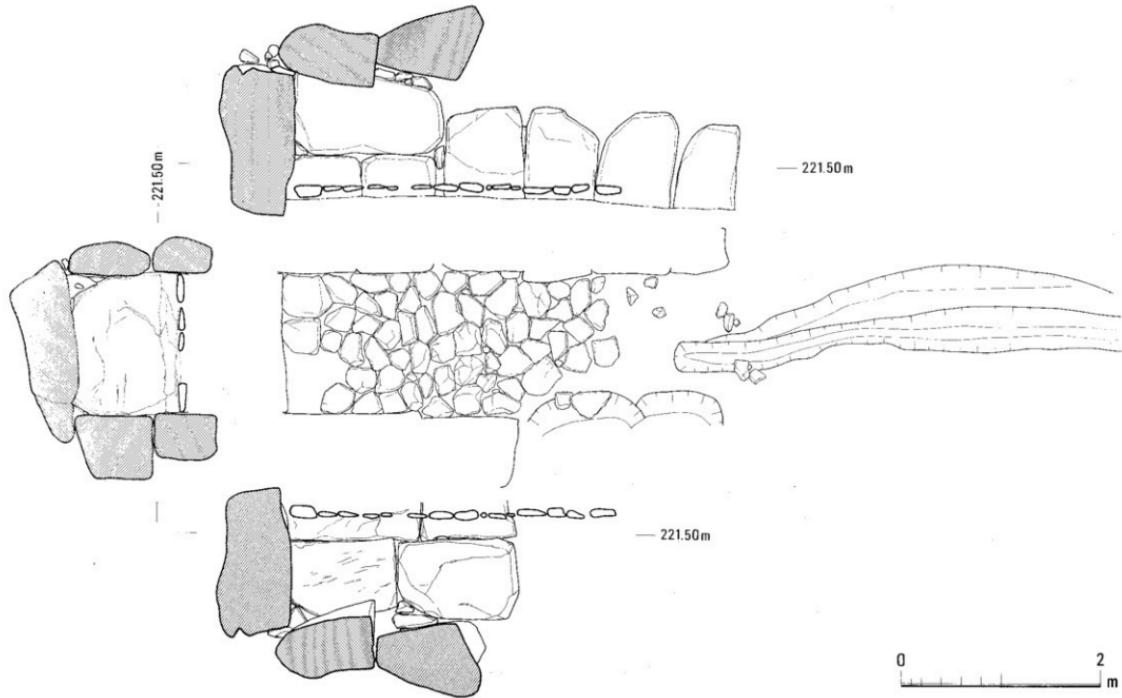


图9 P3号填石室实测图

している。最近の同氏の研究は更に細分され押し進められており、畿内の大型横穴式石室は、天王山式→石舞台式→岩屋山式→岩屋山亜式→二子塚式という流れがあり、その実年代も考究されているが、これまでの年代観と大幅な変更のみられる古墳も存在する。一例をあげると本稿でも取り扱う聖徳太子墓の実年代を7世紀の第3四半期とされたことがあげられるが、聖徳太子の没年との矛盾や大化薄葬令の解釈にも大きな問題を投げかけることとなろう。本稿ではこの矛盾もふまえながら磯長谷の主要な終末期の横穴式石室について白石太一郎氏の大型横穴式石室の流れを参考にしながら私見をのべていくことにする。

2.

磯長谷の終末期を中心とした横穴式石室は巨視的にみて4期の変遷をたどることが可能である。以下、系譜をみつめる意味から各期について述べることにする。

I期 終末期古墳の前段階として設定したもので、一須賀A3号墳を標式とする時期である。^{註3}一須賀A3号墳は、かつて尾尻山2号墳と呼称されていた古墳で、墳丘は約20mの円墳である。石室は左片袖式で、全長8.45m、玄室長3.72m、同幅2.0m、羨道幅1.30mをはかる。石材は自然石をつみあげており、玄室の石積は3~4段である。一須賀古墳群中に多くの古墳がつくられる時期にあたる。

II期 磯長谷において一部自然石を使用するものの石材が大型化する時期で、現状では磯長谷周辺における終末期古墳の初見であり、石塚古墳の石室を標式とする。^{註4}

石塚古墳は、南北の一辺約42m前後をはかる方墳で、現在は消滅したが、幸いなことに森浩一氏の実測図によってその内容を知ることができる。石室は、一部切石を用いた右片袖式で、全長10.6m、玄室長6.1m、同幅2.1m、羨道幅1.7mをはかり、玄室部に家形石棺、羨道部に木棺が存在したという。玄室の側壁は2段積で、羨道は手前側を除くと一段積で形式的には岩屋山式の横穴式石室に先行するものと考えられる。

III期 II期は、切石づくりの石室が構築される時期としたが、後述するIV期と比べ石室規模の大きいことが特徴である。奥壁が2段積か1段積かにより2小期に分離できる。

Ⅲ期前半は、整備された大形の切石石室が構築された。聖徳太子墓がその好例であり、白石氏の岩屋山式の時期にあたる。

聖徳太子墓は、東西径52m、南北径42mの楕円形を呈しており、明治12年の実見記によると石室はみごとな切石づくりで、玄室は2段積、羨道は一段積で、玄室の長さ約5.3m、同幅約3m、羨道長約7m、同幅1.8mをはかり、玄室には石棺ないし、棺台が3個あつ^{註5}

註5
たという。

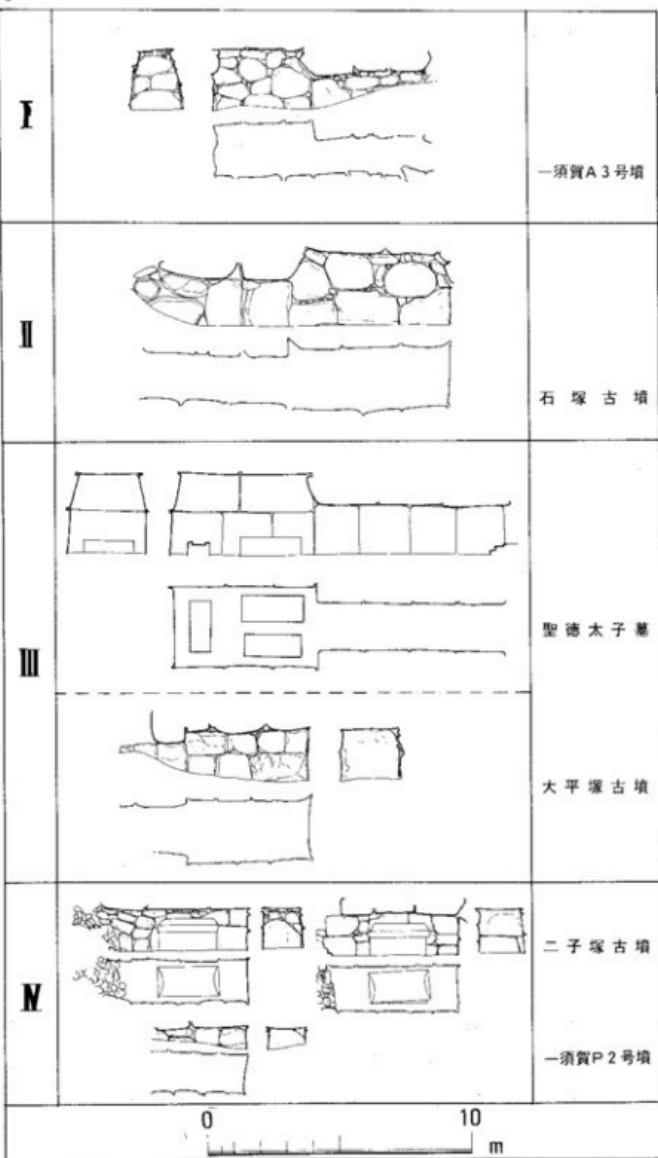


図14 機長谷における終末期古墳の変遷
- 26 -

Ⅲ期後半の例には、現在近鉄の軌道下にある大平塚古墳^{註6}があげられる。大平塚古墳は、奥壁一石、玄室の側壁は2段積、羨道部一段積の両袖式の横穴式石室で、全長7.15m、玄室長4.63m、同幅2.2m、同高1.9m、羨道幅1.8mを有する。側壁の切石は岩屋山式の横穴式石室に比べて稚拙な感があるが、仕口の存在する部分もある。大平塚の石室石材は奥壁と天井石の大型石材が花崗岩である以外、すべて寺山産の石英安山岩が用いられており、極めて存地性の強い古墳と考えられる。

なお、今回調査した一須賀P3号墳は、奥壁が一段、玄室側壁が2段積、羨道が1段積であることから、この時期に属するものと考えられる。

IV期 石室石材は切石であるものの、石室が小型化される時期で、昭和57年3月に発掘調査を実施し、純銀製帶金具が出土した伽山墳墓の前もしくは前々段階と推定される。^{註7}

二子塚古墳および、今回実測調査を実施した一須賀P2号墳がその好例である。

^{註8}

二子塚古墳は、畿内の終末期古墳の中でも最終に位置づけられる標式古墳で、白石太一郎氏の二子塚式がこの時期にあたる。二子塚古墳は、全長60mの双方墳で、両丘ともにはほぼ同形、同大のカマボコ型の削抜式家形石棺を内蔵する小型横穴式石室で、北丘のものは玄室長4.9m、同幅1.7m、同高さ1.6mで、南丘のものは、玄室長4.4m、同幅1.6mで、いずれも短い羨道部が付けられ、ともに羨門部は人頭人の河原石で閉塞が行なわれており、石室壁面は漆喰により白壁に仕上げられていたと考えられる。

一須賀P2号墳は、石室構成、平面プラン、漆喰の使用等の技法が、二子塚古墳と共に同時期の築造と考えられる。

3.

以上が、各期の古墳およびその特質の概要であるが次に各古墳の年代について考え各期の問題点についてのべる。

I期は、いわゆる自然石使用の段階で、この時期の大型古墳は磯長谷には存在しない。I期に属する古墳は、磯長谷では一須賀古墳群中に多く存在し、群集墳中に採用されている。一須賀A3号墳からは発掘調査に伴うものではないが、副葬品の存在が確認されている。出土遺物には、須恵器、土師器とともに鏡板、兵庫鎖等の馬具、鐵劍、鐵刀があり、堀田啓一氏によって図示されている。図示された須恵器の中には一見6世紀前半とも考えられる杯身の小片があるが、その他の須恵器にはほぼ完形の長頸壺があり、その年代観や石室の壁面構成から6世紀後半の年代を与えることが可能である。したがってI期は6世紀後半以前に築造されたということになる。

Ⅱ期とした石塚古墳は、出土須恵器から白石太一郎氏によって7世紀前半の年代が与えられている。白石氏によると石塚古墳出土の須恵器は、森編年のIV型式前半にあたるとのことであるが、森編年のIV型式前半は実際にはかなりの年代幅があると考えられ、石塚古墳の須恵器の実測図が公開されていない現状では年代決定に若干の躊躇を感じる。また、石塚古墳は先にもみたように玄室に石棺、羨道に木棺というように複次の埋葬が判明しており、追葬に伴う副葬遺物の可能性も考えられ、出土須恵器の持つ意味は想像以上に大きいが、ここでは白石説に従って、一応石塚古墳の年代を7世紀の第2四半期としておくことにする。しかしながら、この出土須恵器からみた年代は、あくまでも石室が使用された下限を示すものとして理解しておきたい。

ところで、Ⅱ期の年代を7世紀第2四半期とすると、Ⅰ期とⅡ期の間にはかなりの年代差があり、6世紀末から7世紀初頭にかけて空白があることに気付く。おそらく、Ⅰ期とⅡ期の間には1つの型式が設定できると考えられるが、現在使用しうる資料の中では好資料はみあたらない。Ⅰ期とⅡ期の間に埋める古墳は、おそらく一須賀古墳群中に存在すると考えられるが、Ⅰ期としたものとはその規模はほかわりがないと考えられる。

Ⅲ期前半とした聖徳太子墓は、喜田貞吉氏以来、年代の確実な古墳として位置づけられており、廟である叡福寺の存在からも否定することは困難であり、聖徳太子の没年が、推古30年（622年）と考えられることから本古墳の年代もこれとあまり隔った時期でないと一般に考えられている。

しかしながら、白石太一郎氏は、岩屋山式石室が石塚古墳につづく型式のものであることから、聖徳太子墓の年代を7世紀の第3四半期に位置づけられており、先の年代観と矛盾する。この点について白石氏は、「聖徳太子墓が岩屋山石室であるとすれば、その築造年代が太子没年より相当遅れたものと仮定しておくほかはなく、その石室構造を確認できない現状では聖徳太子墓が岩屋山式石室であろうとする一つの想定をよりどころにして岩屋山式の年代を620年頃まで引き上げることはできない。」^{註12}とされる。しかしながら、私見では聖徳太子墓が岩屋山式石室であることは疑いなく、文献の立場からも聖徳太子墓の造営が、太子の没年よりも大幅に遅れるという記録がない以上、聖徳太子墓の年代を7世紀第2四半期とすることが妥当であると考えられる。

このようにみると、Ⅱ期とした石塚古墳とⅢ期前半の標式とした聖徳太子墓が、同時期ということになる。石塚古墳の石室構造が、聖徳太子墓のような切石構造をもつ古墳に型

式的に先行することは妥当性があり賛同を感じるが、石塚古墳と聖徳太子墓の関係に限っては、石塚古墳出土の須恵器が追葬品である可能性を考えつつも、実際には同時期につくられた古墳と考えておく他はない。

以上のことから、石塚古墳、聖徳太子墓に限っては型式差は必ずしも時間差となりえない好資料ということになり、整備された切石石室と一部切石使用の石室が重なりをもって同時併存し、築造されていたと考えておくこととする。

Ⅲ期後半の例としてあげた大平塚古墳は、出土遺物もなく年代比定の非常に困難な古墳といえるが、奥壁が一石で構築されていることから白石太一郎氏による岩屋山並式と共通する要素をもっている。後述するIV期の年代観からみて7世紀中葉から後半の年代を与えておくこととする。

IV期とした二子塚古墳の年代については、発掘当初7世紀中葉という年代観が調査担当者である北野耕平氏によって与えられているが、この年代観では、これまで述べてきた編遷とは矛盾が生じる。二子塚古墳は発掘時にも上器等の明確に年代判定のできる遺物も出土しておらず、年代を決定することは他の古墳と同様に困難であるが、内蔵された家形石棺が参考になる。

二子塚古墳の家形石棺は、既に繩掛突起を欠く形式のもので家形石棺の本來の特徴である天井部半坦面もなく天井部が「カマボコ型」を成すものである。この家型石棺と同時期もしくはやや先行すると考えられる石棺をもつ古墳として松井塚古墳があげられる。松井塚古墳も既に繩掛突起を欠く家形の横口式石槨を囲むように石室がつくられた古墳で^{註13}、ほぼ年代の推定できる土師器の皿が、昭和33年の発掘時に出土している。この土師器皿は、内面の上方にラセン暗文、下方に放射状暗文が施されるもので7世紀後半に位置づけられる。従って、二子塚古墳の年代は7世紀後半を上りえないということになる。

以上の結果、一須賀P3号墳は、大平塚古墳を標式とするⅢ期後半に築造された古墳で7世紀の第3四半期に築造され、一須賀P4号墳は、二子塚古墳を標式とするIV期に築造された古墳で7世紀第四半期に築造されたことが明らかとなり、両古墳が終末期古墳のうちでも後半に位置することが判明した。

ところで、一須賀古墳群では、これまで60基近くの古墳の発掘調査が実施されているがいずれの古墳も6世紀中葉から7世紀前半にかけての3世紀にわたって築造されたものであり、一須賀P2号墳、P3号墳のように7世紀中葉以降に築造されたものは皆無であり、

一須賀古墳群にあっては特異な支群ということになってしまう。このような視点に立って一須賀P支群の地理的位置を再度みると、一須賀古墳群の南端に位置し中心支群と比べて谷を隔てて、独立した地形上にあることに気付く。しかも、一須賀P支群を除く他の古墳がすべて磯長谷側（北側）へ向ってのびる尾根上に築かれているのに対して、一須賀P支群のみは磯長谷側とは逆の平石側へのびる丘陵上に立地していることも合せ考えると、P支群の古墳は、他の一須賀古墳群の個々の古墳とは異なった造営主体の築造にかかるもので、むしろ同時期の古墳があるアカハゲ古墳、ツカマワリ古墳を含む、平石古墳群グループと同一の造営主体の築造によるものと考える方が妥当ということになる。なお蛇足であるが、P2号墳の壁面の隙間につけられた漆喰は、指頭やへら状工具によるものであり、^{註15}北野耕平先生の教示によるとツカマワリ古墳の壁面にみられる漆喰めり込めの技法と同一であり、両者の間に密接な関係を想起させる。

以上、磯長谷における終末期古墳の変遷とその年代観について述べ一須賀P2号墳、P3号墳と占める位置を示し、その年代観からP支群が本来は一須賀古墳群として包括すべきでないということを明らかにした。

しかしながら、編集者の力量不足から調査に基づく古墳の歴史的位置づけを行うまでには至らずこの点についての種々の批判は甘んじて受けたい。また、早くから原稿および編集依頼されていたにもかかわらず、調査後2年もたってしまったことを種々の事情があったとはいえ河南町教育委員会当局におわびするとともに、早くから原稿を提出していただいている調査関係者におわびしたい。

なお、いつものことながら本書がなったのは、調査に協力いただいた諸氏・諸娘の援助の賜であるということを記し感謝の意をあらわしたい。また、本書が河南町埋蔵文化財調査報告第1集として、河南町の歴史を考える上に一助となることを願い、今後の研鑽を重ねたいと考えている。本冊子に対して、多くの叱責をたまわれば幸いである。（山本）

註1 白石太一郎 「畿内の後期大型群集墳に関する一試考 一高安千塚および平尾山千塚を中心として」（『古代学研究』42・43合併号 昭和41年）

註2 白石太一郎 「畿内における古墳の終末」（『国立歴史民族博物館研究報告』第1集

(昭和57年)

- 註3 堀田 啓一 「南河内郡太子町葉室の古墳」（『四天王寺短大紀要』 昭和37年）
- 註4 森 浩一 「古墳と古代国家の誕生」（『大阪府史』第1巻 昭和52年）
- 註5 梅原 米治 「聖德太子磯長の御廟」（『日本考古学論叢』所収 昭和15年）
- 註6 上野 勝己 「太子の古墳」（昭和50年）また、石室の実測は昭和57年10月に実施した。
- 註7 大阪府教育委員会 『伽山遺跡発掘調査概要・Ⅰ』（昭和57年）
- 註8 北野 耕平 「河内二子塚調査概要」（『古代学研究』第19号 昭和33年）
- 註9 堀田 啓一 「南河内郡太子町葉室の古墳」（前掲）
- 註10 白石太一郎 「畿内における古墳の終末」（前掲）
- 註11 喜田 真吉 「古墳墓年代の研究」（『歴史地理』第24巻第3・5・6号、第25巻第3～6号、大正3・4年）
- 註12 白石太一郎 「畿内における古墳の終末」（前掲）
- 註13 北野 耕平 「河内二子塚調査概要」（前掲）
- 註14 大阪府教育委員会 『松井塚古墳調査概要』（昭和33年）
- 註15 神戸商船大学教授北野耕平先生の御教示による。

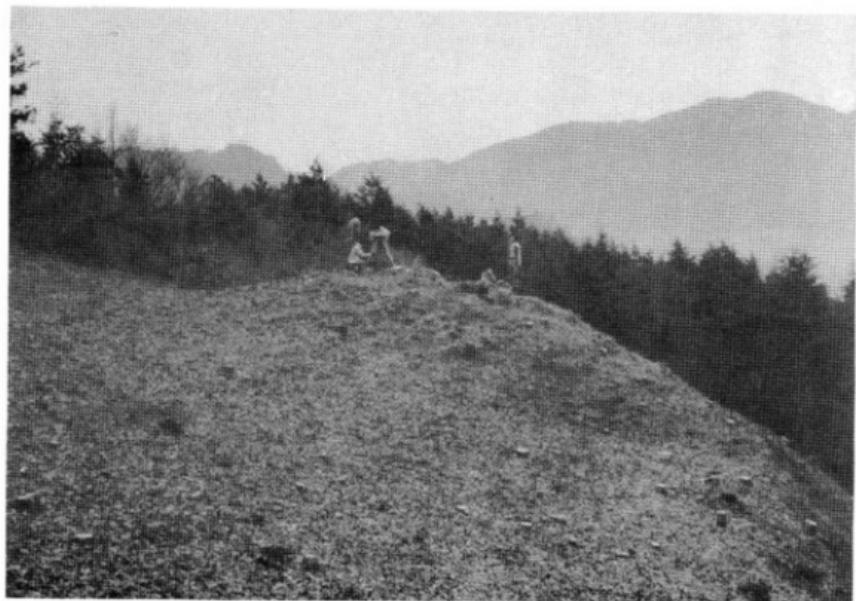
図 版

圖版第一 一須賀古墳群P支群周辺航空写真

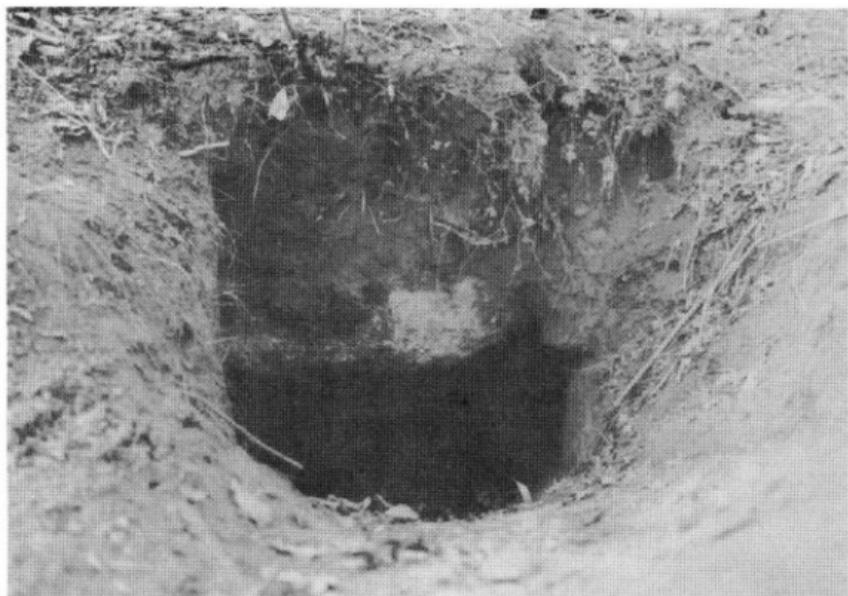




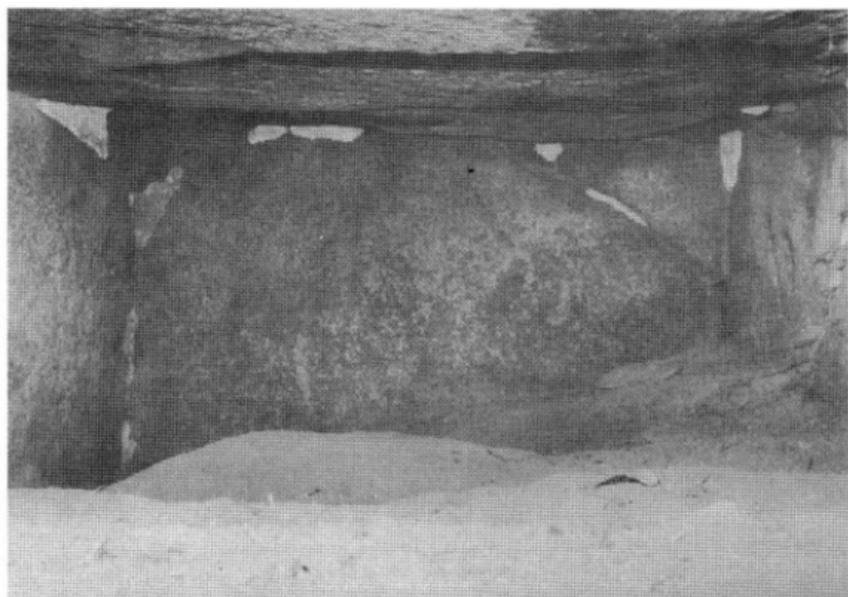
P—2号墳墳丘 (北から)



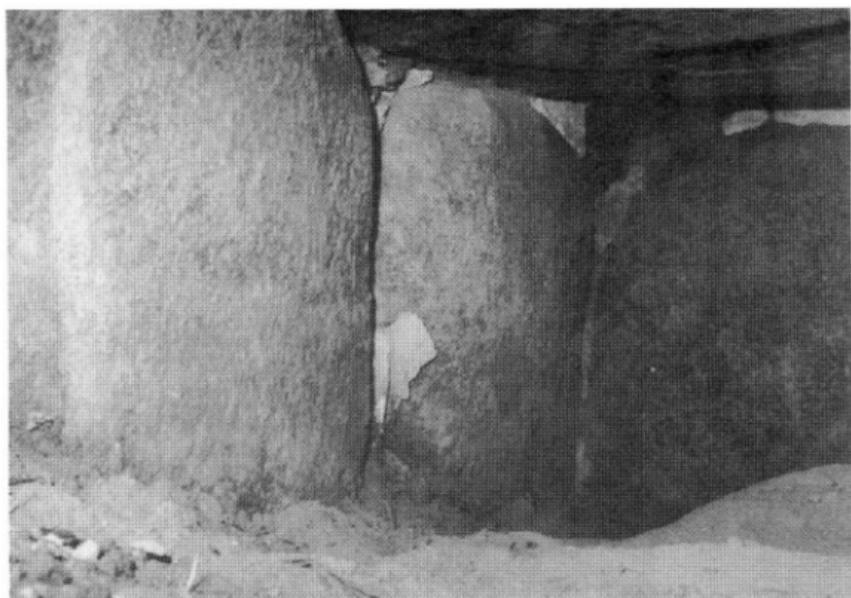
同上 (西から)



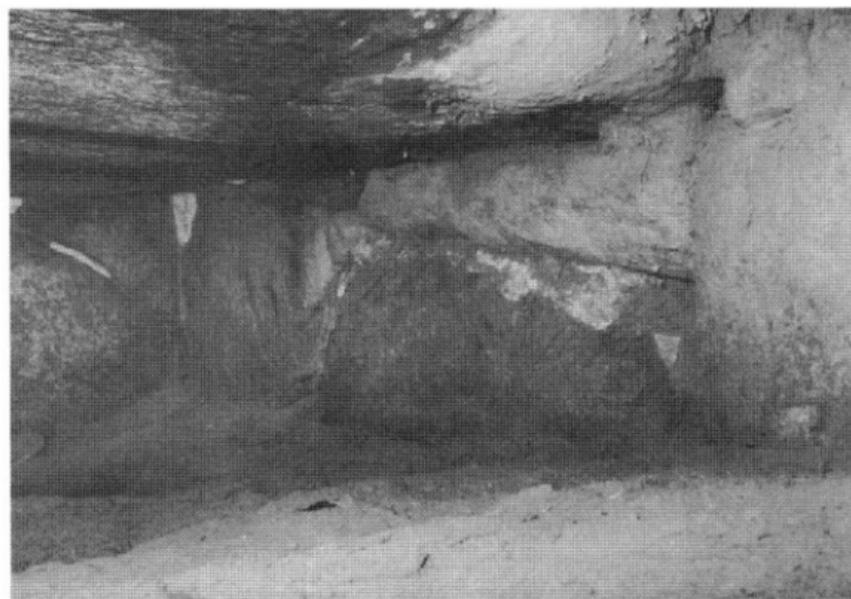
P-2号墳石室開口部 (南から)



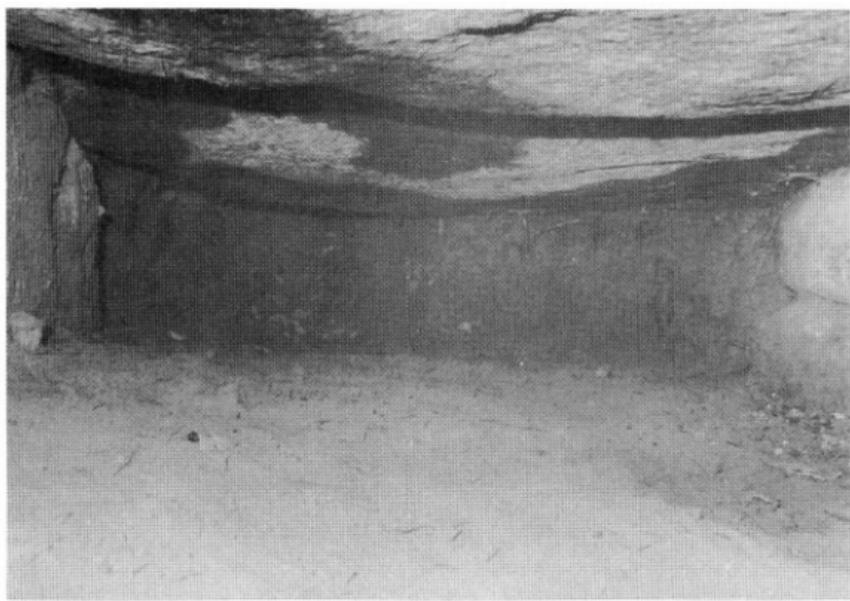
P-2号墳石室内部 (南から)



P—2号墳石室內西壁 (南から)



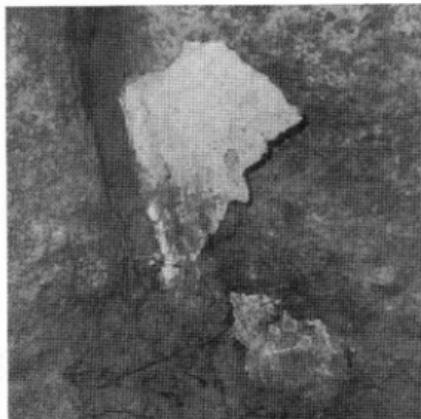
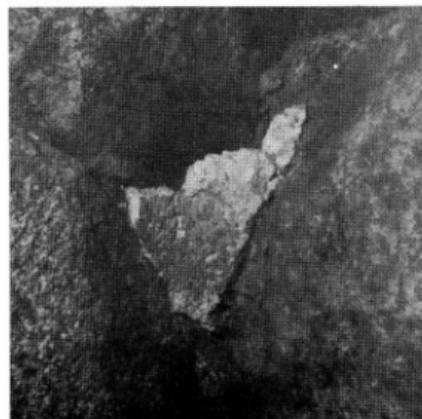
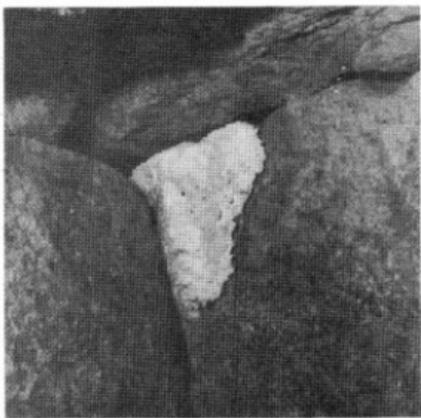
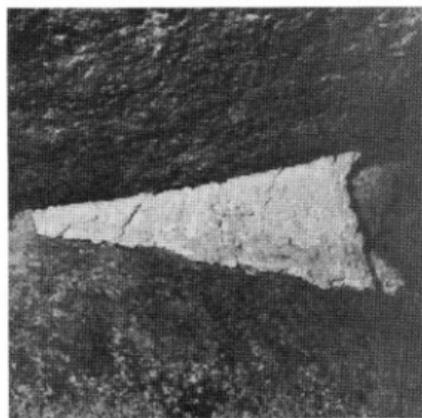
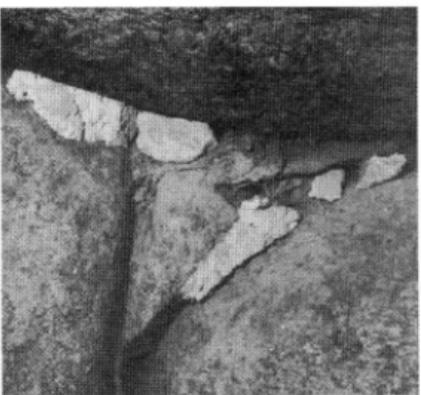
P—2号墳石室內東壁 (南から)



P—2号墳石室 (北から)



P—2号墳石室内漆喰遺存状況 (西から)



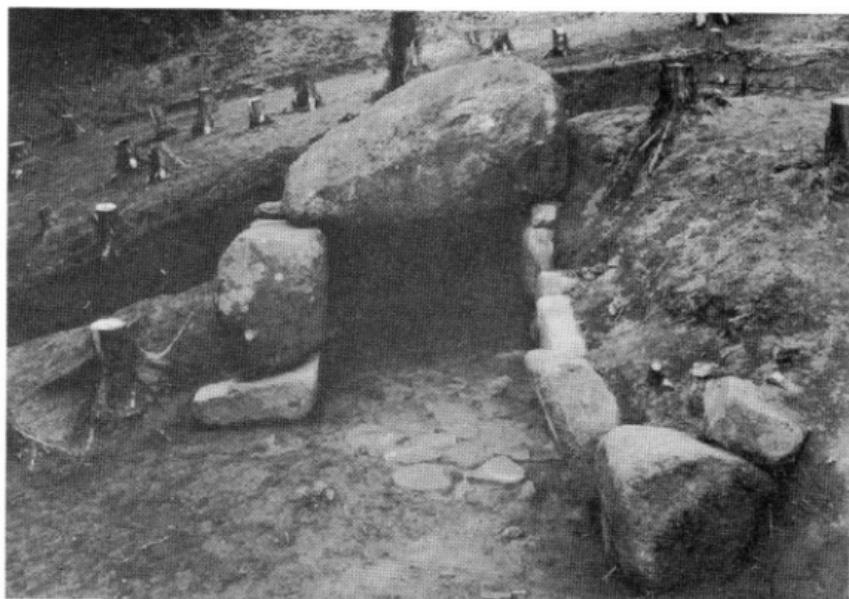
P—2号填石室内漆喰遺存状况細部



調査前のP—3号墳 (南から)



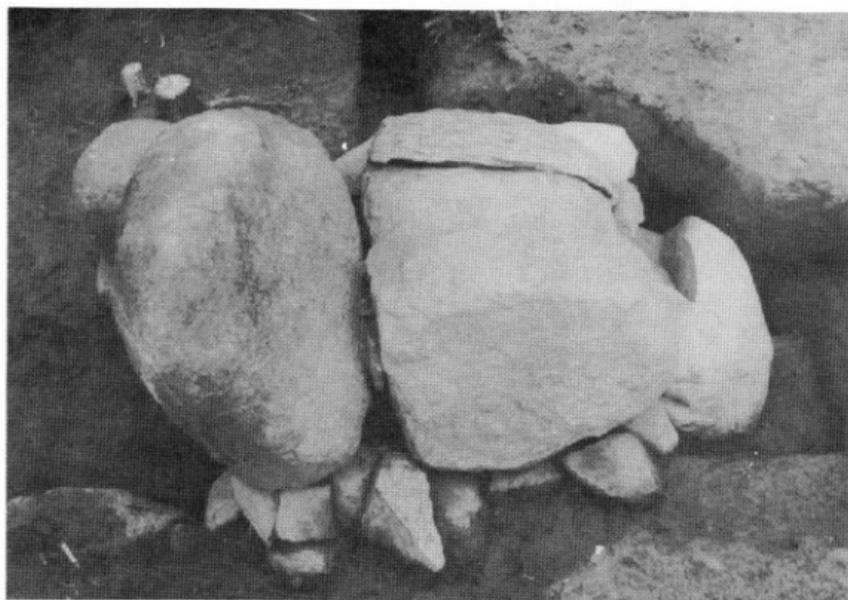
同上 (西から)



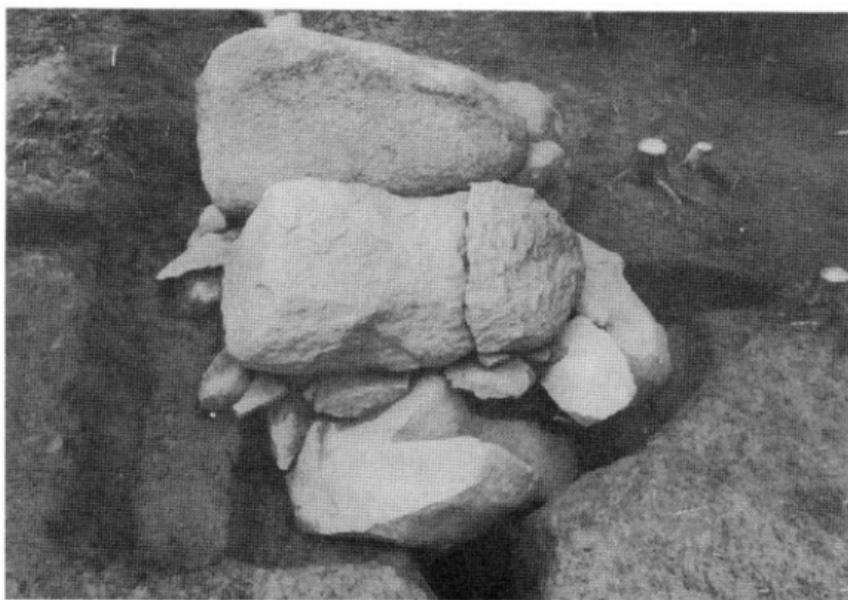
P—3号墳石敷 (南から)



同上細部 (南から)



P—3号墳天井石外面 (東から)



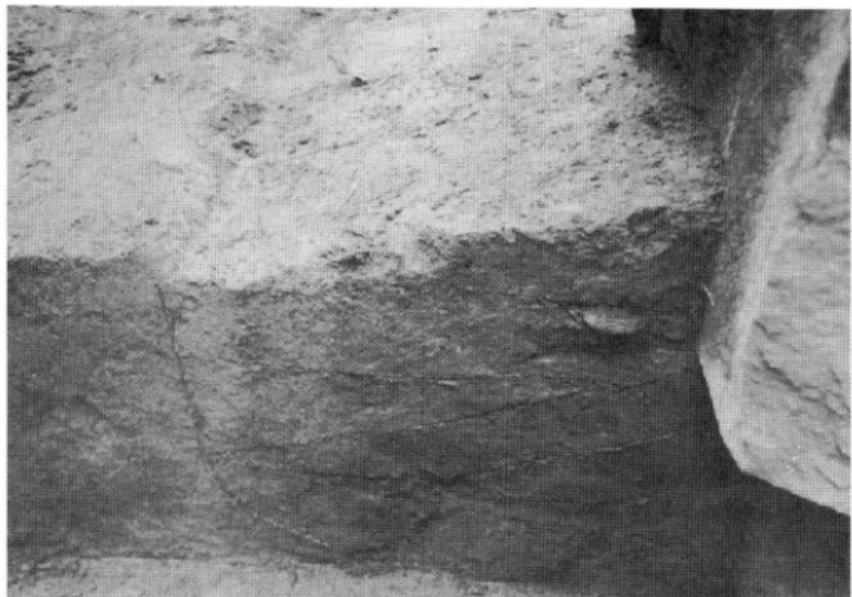
同上 (南から)



P—3号墳天井部裏込石の状況 (北から)



同上 (東から)



P—3号墳石室西侧掘方断面 (南から)



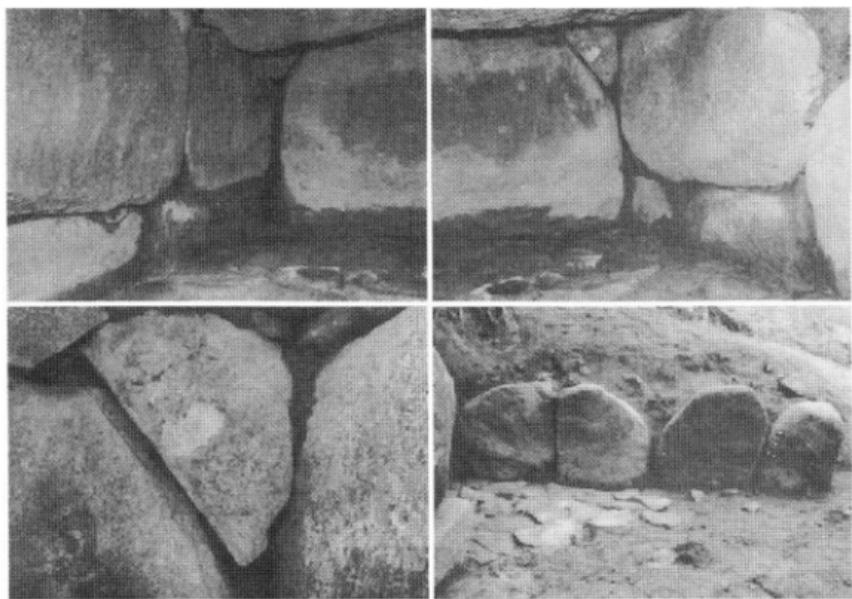
P—3号墳調査後の墳丘 (北から)



P—3号墳調査後の墳丘 (北から)



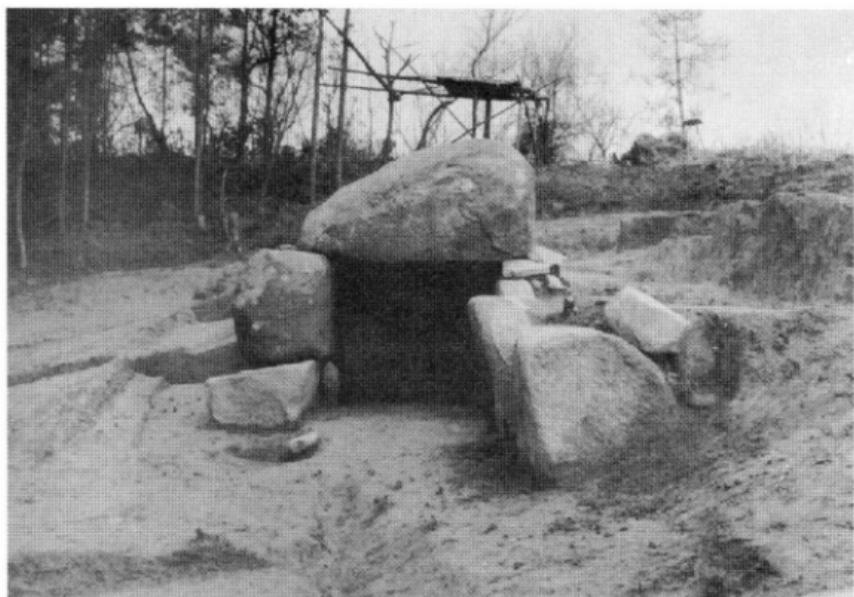
同上 (北東から)



P—3号墳石組細部



P—3号墳調査後 (南西から)



P-3号墳調査後の石室 (手前排水溝・南から)



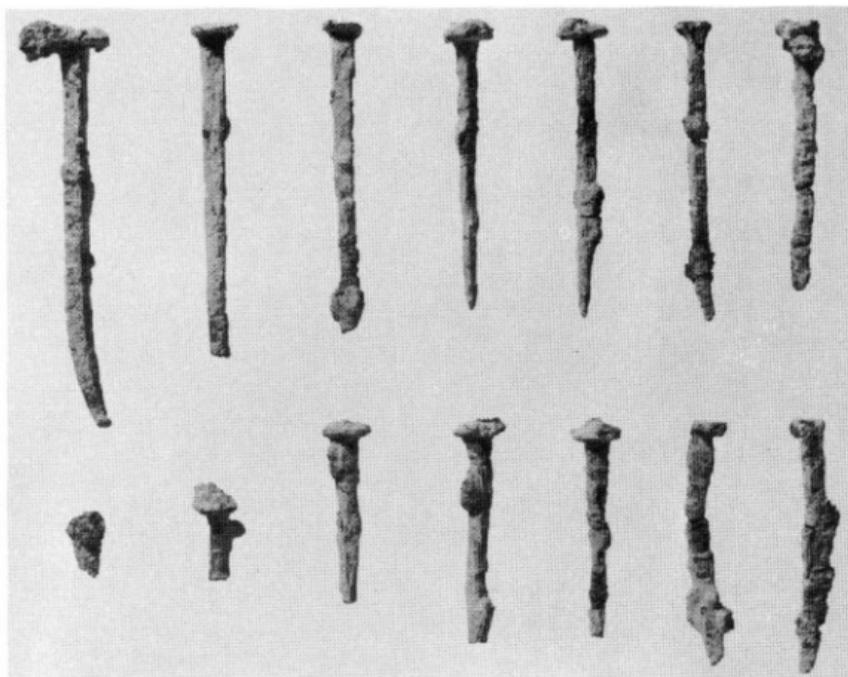
P-3号墳排水溝 (北から)



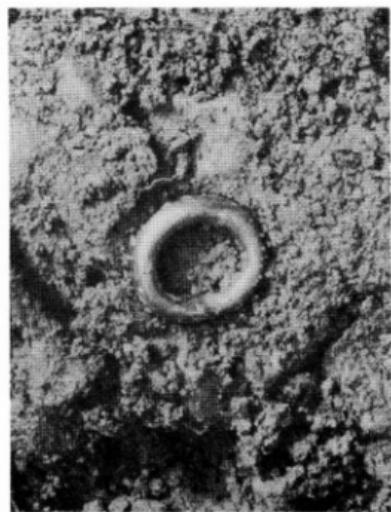
P—3号墳北側周溝 (西から)



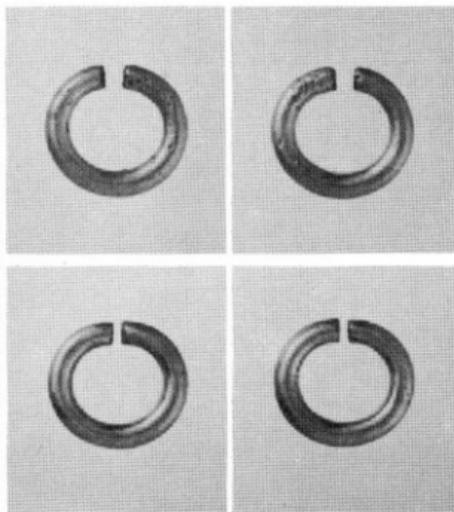
P—3号墳東側周溝断面 (南から)



P—3号墳出土鐵釘



P—3号墳出土金環状況



P—3号墳出土金環

